
現代的なもので、ファンタジーを旅する。

とある作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代的なもので、ファンタジーを旅する。

【Nコード】

N9945X

【作者名】

とある作者

【あらすじ】

いかにも普通な感じに、現代日本で暮らしていた山崎 真は、電車から降りた瞬間異世界へ飛ばされます。

一日に、現代的なものを、3つだけ召喚できる力を、わけのわからない奴に強制的に持たされてしまった山崎 真は、はたして、どのように異世界を旅するのだろうか：そんな物語です。

プロローグ（前書き）

こんにちは、とある作者です。相変わらず文才がない自分ですが、
どうもよろしくお願いします。投稿作品は今回で二作目で、できた
らもう一作目も見てくれると嬉しいです。基本的にこの小説は作者
の気分転換的に書いていることと、作者の家にあるパソコンは、イ
ンターネットに繋がっていないと言う悲劇のせいで、ものいつそ不
定期更新です、以下の二点を踏まえてお読みください、それでは、
はじまりはじまり！

プロローグ

「…ここどこだ」

現在起きてしまった、そんなありえない非現実的な現象に、山崎真は、ついついそんな事を、空しげにつぶやいてしまったのであった。

目の前には、まさしく、のどかな草原と山々、そして遠くに見える、まるでアルプス山脈のような高々とした山脈が広がっていた。

とりあえず彼は何故驚いているのか、おそらくそれは、この言葉を聞いただけでは想像することは難しいであろう。しかし、タイミングよく真は、次の瞬間こう言った。

「…電車から降りたら、こんな世界が広がってるとか…可笑しすぎるだろ」

そう、彼はさっきまで地球の、日本国の、東京にいたのである、しかも電車の中…真は、今日一日中暇なので、暇つぶしに秋葉原にも行くか、そう思い、自らの家の近くにある最寄りの駅から、秋葉原へ、電車へ行ったのであった、そして、十分後、電車はきちん

と、それこそ異常なほどぴったりに、秋葉原駅に着いたのである：ここまでは問題なかったはずであった、しかし、問題はそれからであった。

(…ここまではいいよな)

真は、自らのここまでの行動を確認した後、そのあとどうなったかを、まるで走馬灯のように思いだしていた。

(電車のドアにはそれまでは、ちゃんと秋葉原駅構内を出口としていたはずだ、俺の記憶がそう言ってるいるのだから間違いないハズー！)

真はそんな感じに、今までのことを思い出すのに成功した。

(しかし、俺が意気揚揚と、電車のドアから飛び出した瞬間)

「…きれいな自然の風景だな」

である。

「…どこのラノベ的展開だよ」

山崎真、彼は人の小説好きである、読む本は紙媒体、電子媒体問わずである。もちろん、ラノベだろうが、小説を読もうだろうが、所せましと呼んでいるのである、そんな彼がまっさきにそう思ったのは当然のことかもしれない。

しかし、もちろんそれだけで彼の心が静まるはずもない。

（確かに…確かにさ、自分もラノベ的展開になってくれて、ハイレムだとか、チートだとかやってみたいとか思ったことあるよ!!毎日繰り返しされる日常に飽き飽きしてた時もあったさ、けどさ…さすがにこれはないだろ…）

真はそんな感じに半分キレながらそう思った。

「…おそらく、ここは異世界だな」

真は、それこそ毎日と呼んでいた、小説を読もうで流行？していた異世界トリップ物を元に直感的にそう思った。

「……………」

ひゅー……………

しかし、この異世界トリップはないだろ…と彼は思った。

（せめてさ、美少女が俺を勇者として召喚してくれたとか、そんな感じだったらいいのに）

真はそう思ったが、もちろん、目の前に召喚用の魔法陣も、召喚師としての美少女もいなかった。

ひゅー……………

風が…ただただ貫くように吹いてゆくだけだった…

「…ん？なんか違和感が」

真は、お尻に何か張られているような違和感を感じ、自らのおしりを触ってみた。

「…なんで、尻に紙が張られてあるんだよ!!」

なぜか、自らの尻に感触的に紙らしきものが張られていることに気づき、ちよつとばかりイライラしながら、紙を尻から取り外し、なんだこれ？そんな感じに紙を見た。

形状は大学ノートの一ページを荒々しく破いたような感じの紙であった、もうちよつときれいに破れよ!!そう真が思ったが、その紙に何かが書かれてあることに気づき、改めて紙を見つめた。

そこにはこんな事が書かれてあった。

説明書

1、あなたは、異世界へ転移しました。

2、それだけでは、つまらないので、あなたは自分の世界で存在していた、もしくは存在している物を、1日に3つだけ、あなたの視界内の何処にでも召喚させる事ができます。

3、あと、あなたの精神をちよつと弄くりました。

あなたはこの様に異世界に突然転移しても取り乱したり、パニックも起こしませんし、人を殺してもそれは同じです。

4、あとは、のんびり異世界ライフをおもいつきり楽しんでください。

「・・・はあ？」

そんな感じの、かなりふざけたような内容が、その乱暴に破かれた感じのノートに書かれてあった。

「・・・」

真は、茫然としながら、周りを見渡した。

もちろん見えるのは、彼を今まで色々な、危険やらなんやらから守ってくれた、馴染みのある大都市ではなく、のどかな草原と山々、そして遠くに見える、まるでアルプス山脈のような高々とした山脈：簡単にいえば、ここには人間の形跡も：彼を元の世界のように保護してくれた国、警察、家族もない。もちろん、知り合いも頼れる人も：

「・・・」

しかし、真はさらに違う意味で茫然としてしまった。なぜなら、そんな、普通の人にとってみれば、狂ってしまいそうな環境に置かれたということを認識してしまったのに、それを何とも感じない、まるで今までもそうだったじゃないか、という、そんな感じの自分に、茫然としてしまったのである。

「・・・これから俺はどうすればいいんだ」

ひ
ゆ

一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一

と、風が山脈下り、そして山々、次に近くにある大量にい木々が生い茂る、森の中を通り、最後に、マコトのいる草原を駆け廻り、真を、その自らの風で貫いたあと。

これまた、青々とした、大空に向かって、溶けていった。

プロローグ（後書き）

感想は、作者を動かす燃料です、（称賛、批判等問わず）どうか燃料の補給をよろしくお願いします。

とりあえずの現状確認

「・・・さて、どうするか」

真はこんな状況下に置かれてもなお、何も感じず、落ち着いている自分を恨みながらそうつぶやいた。

いままで真は、何で尻にこんな大事な物張るんだよ、絶対これ張った奴は悪意あるだろとか、誰なんだよ俺にこの手紙を書いたやつは！！とか、そんな愚痴を永遠と言っていたが、そんなこと言っても状況は打開するはずもなく、結局真は愚痴を言うのも止めて、現実的にこれからどうするればいいのか考えなければならぬと思う、そう呟いたのだった。

まず、真は自分が持っている物を確認した。

ナップザックに、その中にある物として、メモ帳、筆箱、その中にあるシャーペン5本、マーカーペン1本、ネームペン一本、蛍光ペン、赤、青、黄色、緑、金色の5本、鉛筆3本、消しゴム2個、20?物差し一個、コンパス1個、ハサミ一個、修正ペン一個、560円区間の切符、携帯電話（もちろん圏外）、財布、そしてその中にある5000円札と小銭として568円が有るのみであった。

「...まあ、秋葉原に遊びに行くだけだったし、これぐらいしか持ってきてないのは当たり前か」

真は自分の持ち物の確認を終えた後、とりあえずナップザックを置きこよう呟いた。

「次に、ここがどんな異世界かだ」
真はまず、そのことについて考えた。

（まず異世界にといっても色々ある、剣と魔法の世界、技術が異様に発達した世界、魔法と科学の世界だとかだな）

その時一瞬、真は、ここには人間もない、ただ豊かな自然だけが広がる世界かもしれないと思ったが、それはないとなぜか納得していた。

なぜなら展開的にそれはないだろうと、いままで読んできた小説を元にそう思ったのである。

最もそうでもない可能性もあるのだが・・・

そんな考えを、真はあまり考えないようにした。

（・・・こればかりは調べてみるしかないな）

目の前にある風景だけで、ここがどんな世界なのかなんて分かるわけもなく、こればかりは現地で調べてみるしかない、真はそう思い、このことについてはとりあえず保留ということにして置くことにしたのであった。

次に、この世界の言葉やら、言語の問題について、

大体このパターンでは、補正がついて言葉言語、両方とも何故か理解できるか、もしくは言葉が通じて、言語を書く、もしくは読むことはできないかである。

しかし、このことについても、同じく確かめようもないので、真はまた保留にすることにした。

後は、召喚について

手紙には、真の世界、つまり地球に存在しているか、もしくはしていた物を一日に3つだけ、召喚できると書かれてある、一日に3つだけとはいえ、つまりこれは、真の世界に存在している道具はもちろん、昔は存在していた物までも召喚できることを意味している。

また、なんでも召喚できるところから…それこそ、10円のうまい棒から、戦艦大和まで召喚できることになってしまふ…。もっとも、大和なんて召喚しても、操縦なんてできないから意味なし、同じことは航空機や戦車にも言える。

しかし、真はそのことから…とある究極の攻撃ができてしまうと言う、考えにたどり着いたのであった。

「…てことは核爆弾も召喚できるということか」

（視界内のどこにでもだから、リトルボーイなんかを上空のどこかにでも召喚すれば、簡単に核攻撃できる…やばい…これはチートだぜ…）

真はそう思ったが、しかし、

（…と言っても、日本人としてはさすがにそんな攻撃はしたくないけど）

唯一の被爆国の日本人である真がそう思ったのは当然のことであった。

（もっとも、今の所その必要性もないし、これは最終手段としてとおこう）

真はそう思い、次に、召喚できる1個の単位について考えてみた。

たとえば、飴をなめたいと思った時、たった一粒の飴玉しか召喚できないのか、それとも飴玉の袋ごとという一個の範囲で、大量に飴玉を召喚できるかどうかである。

（これからの食糧についてのこともあるし：ぜひとも後者であってほしいが：これは実際に召喚してみなければ分からないしな：）それに、一日に召喚できるものは三つしかない、これは慎重にやらなくては：無駄遣いはできない：

結局真は、このことも、この世界について調べながら考えることにした。

次に武装

武装については、簡単に決まった、真の世界で、何とかやり方も本で分かっている、初心者でも扱えて、なおかつ威力があるものと言ったら拳銃しかないのであった。

（明らかに、身を守るにも必要だし、俺をここに転移させたやつ
の性格から考えると、あまり治安のよさそうな世界ではないはずだ）
それに本当にちゃんと召喚できるか確かめる必要もあるしな：

真は考えに考えそう思い、最初に召喚するものとして、真は銃にはあまり詳しくないが、たしか、H & amp; K USPとか言う銃が、初心者でも扱えて、なおかつ結構な威力があると、どこかの小説にでも書かれてあったことを思いだし、それを召喚することにした。

「…具体的にどう召喚すればいいんだろう」

手紙にはそういったことは全く書かれていなかったし、どうすればいいのだから

真は、そう迷いながら、こうなったら適当にやってみようと思い、真はさっそく実行することにした。

「召喚！！」

「・・・」

反応はなかった：

「山崎真が告げる、H&K USPを召喚せよ！！」

真は、もしかしたらもうちょっと具体的に言わなくてはいけないのか？そう考え、今度は、はっきりと、アニメとかで見た魔法使いが言っていた呪文みたいに叫び、なおかつ、召喚するものをイメージしながら叫んだ。

そのことが功をそうしたのだろうか、突然「バツ！！」という乾いた音ともにまさしく物理法則に真っ向からケンカを売るがごとく、突然、拳銃・・・H&K USPが忽然と、真の足元に現れたのである。

「・・・すごいな」

一体どういう仕組みなのか、検討もつかないが、初めて見る光景に高揚感感じていた。

（とりあえず、召喚の仕方は分かった、自分の名前と召喚する者の名所を言い、なおかつ、召喚するものをイメージすればいいのか）

真はそう思いながら、足元にあるH&K USP（以下拳銃）を掴んでみた、しかしその瞬間、真は驚くべきものを目にすることに

なった。

「ブン」

「のは!!」

拳銃をつかんだ瞬間、機械的な音とともに、真の目の前によく、RPGとかで使われるウインドウが突然、いかにも未来的な感じに立体的に表れたのである。

真は何とか冷静になりながらも、一応、そのウインドウ? に書かれてあるものを読んてみた。

山崎 真 十七歳 桜坂高等学校2年生

レベル1

種族 人間

HP	10
MP	0
魔力	0
攻撃力	1
防御力	1
精神力	1000
称号	異世界召喚師
特性	近代兵器操作術 1867年
祝福	なし
武術技	なし
魔法技	なし
現在地	ハーストリア帝国 ヨネハの森林地帯
装備	H&K USP(9mm弾モデル) 残り弾数 15

道具 ナップザック

次のレベルまであと、100

残り召喚数2

「…なんだこれ？」

真は突然現れたウインドウとともに、そこに書かれてあったものゝ然とした。

（つまりこれは、なんだ？俺のステータスって奴？）

一樣、真はRPG物も少々やったことがあるので、直感的にそう思ったのであった。

「…」

真はもう一度ウインドウに目をやった。

（…俺のレベルが1で、HPが10、魔力とMPなんか0、攻撃と防御が1、明らかに可笑しい精神力1000…まあこれは…おそらく謎の奴が精神をいじくったという影響だということはあるが…それに、この世界の基本的な数値がわからないから、俺が強いのか、それとも弱いのか分からないな…）

真は自らの数値を見ながらそんな感想を抱いた。

「…はあー」

しかし真は、何故だか分からないが、直感的に、おそらく自分は弱いだろうと思っていた、レベル1だし…あとは魔法技とか祝福なんと言うよく分からないものもあるが、一体、これはどういったもの

なのか、真にはさっぱりわからないので保留するしかなかった、まあ、悲しいことに、真にはどれもなしだから関係ないが。

(…異世界召喚師とか言う称号は、おそらくおれの世界から武器なんかを召喚できる能力のことだろうということ位は、俺にでもわかる、種族が人間ということも、道具にナツプザックも、装備が指すのはこの拳銃だということも分かる、じゃあ、特性の近代兵器操作術1867年は一体何なんだ…)

真は自分のステータスの中で、近代兵器操作術という手紙にも書いてなかった物にチートとなれるかもしれないと言う期待を含みながら、一体これはどういったものなのかを考えていた。

(…これはもしかしたら、俺が近代兵器を扱えるとかじゃないか？某使い魔のガンダー○ブみたいに)

真は、心の底からそのことに喜びながらも、しかし、自らが拳銃を握っていても、拳銃の詳しい使い方が頭に流れ込んでくるとかいうことはなかった。

(…違うのか…俺が近代兵器を扱うことができないと言っても言うのか…いや待てよ考えろ)

真は特性の欄内にある、近代兵器操作術の横の、1867年という数字に注目した。

(…これって、俺の世界の西暦ばくはないか？横に年とか書いてあるし)

そのことに真は気づき、そしてそのことの意味に気づいた。

(…ッ!!これはもしかして、使える兵器の年代じゃないのか？たとえばこれは、1867年までに開発された兵器が使えること示し、そしてそれ以降に開発された兵器は扱うことができないといこ

とか!!)

なるほど…そういう事か、と真は納得すると同時に、じゃあこの拳銃召喚した意味ほとんどなくね?とも思ったが、今更返品などできるはずもなく、まさか捨てるのももったいないので、そのまま持っていることにした。

(また召喚するにしてももったいないし、またあとで考えよう)
真は思った。

(…とりあえず…近代兵器操作術というのはどうなのかは分かった、次に、現在地?についてだ)

真は、今度ウインドウの現在地の欄について注目した。

(ハーストリア帝国?オーストリアと名前が似ているが…気のせいかな?)

真は自分の世界にある国の名前にちょっとばかり似ているハーストリア帝国が一体どのような国なのか、そしてもしかしたらあるかも知れないオーストリアとの関連性についても考えた。

(…だめだ、ちっともこの世界が結局どういった世界なのかは分からない)

唯一ステータスから分かるのは、魔法力や、魔力、魔法技などから、この世界には魔法があること位は分かるが、聖徳太子でも、東大卒でもないただの高校生の真が、たったそれだけの情報で、この世界のことを、分かるはずもなかった。

(…とりあえず、ステータスの種族なんかがあることから、ファンタジーな世界かも知れないし、そうでなくても、人間なんかは絶対いるだろう、とりあえず、道やら町やらなんかを探してみるか)

精神をいじくられたことにより、あまり緊張感を感じなくなった真は、冷静にそうまとめることができ、とりあえず、そこらに人のいる場所は有るか無いかを探しながら、ステータスの事やら、異世召還師を使つての新たな攻撃も考えながら、歩くことにした。

（…とりあえずステータスをいったん消すか）

真は一瞬ステータスはどうかやったら消すことができるのか迷ったが、消えろと念じれば消えたので、試しにまた表れろと念じたら表れたので、とりあえず大体のステータスの操り方は分かったのであった。

「…さて…一様懂れだった異世界を放浪する旅を、始めるとしますか、」

真はそう呟き、元の世界の東京とは比べ物にならないくらい、の、大自然に、足を踏み入れたのであった。

とりあえずの現状確認（後書き）

だめだ：これを書いただけで燃料が底をついた：小説を書くって本当に大変だな。

だれか：感想をくれたら嬉しいな：

後、1867年は大政奉還の年です、自分としては、近代兵器の始まりと言ったらここら辺だと思ったからです。そしてなぜわざわざ使える兵器に制限を課したかというと、いきなり90式戦車やら、F22使って無双しても、面白くないからです。やっぱりだんだん強くなっていくのがいいな。

：できれば、助言とかもほしいです：

ゴブリンを拳銃で倒す話（前書き）

至極簡単な登場人物紹介

山？ 真 十七歳 桜坂高等学校生

秋葉に遊びに行ったら不意打ちにもほどがあるような感じに電車から降りたら異世界へ飛ばされた人、人によって意見は分かれるかわいそうな人、または運のいい人、どうやら謎の人物に遊び感覚で異世界に転移させられたようで、その証拠に手紙が置いてあった、一応強制的に貰われた能力である、異世界召喚師の力を持っている。

これはマコトが居た世界において、存在している物、もしくは存在していたものを召喚できる能力である。哀れ、真はこの能力で異世界を旅していくこととなる。

趣味は読書 特技は読書 得意技は読書 得意教科は読書である。

まあとりあえず読書が好きな奴である。

一応、この物語の主人公である。

ゴブリンを拳銃で倒す話

ここはヨネハの森、ハーストリア王国にある結構な規模の森である。

そんな森の中を走っている17歳位の少女がいた。

「はっ…はっ」

まるで川のように流れるような、そのうえ、水滴がこぼれそうなくらい美しい水色のロングヘアーに、美しい水色の瞳、鈴のが鳴るかのような、きれいな声、そして、雪のようにきめ細やかな肌…如何にもその容姿は、ラノベのヒロインを具現化したような…まあ、簡単にいえば、超のつく美少女であった。

「はっ…はっ」

しかし、その美少女には、似つかわしくない物があった。

「はっ…はっ…痛い…痛いよ」

彼女がそう叫びながら手で押さえる場所をよく見てみると、足の肘に生々しい傷跡があったのである、しかも、ずいぶん放置していたのか、膿んでもいる。

「…う…痛いよ…」

少女の体を今一度良く見ていると、先ほどの傷程ではないにせよ、あちら此方に擦り傷の跡があった。

「はっ…はっだめ…疲れた」

少女は体を極限にまで酷使した様で、その影響からか、倒れこんでしまった。

「はっ…はぁ…ぐすん…」

少女はいつの間にか、忘れていた涙を、思い出したかのように流しだし始めた。

「う…うう…」

少女は泣きながら、こう呟いた。

「助けてよ…誰か…」

「………」

しかし、そんなことを言っている間も、こんな森の中に、都合よく人がいるはずもなく…ただその少女の声は、誰の耳に届かず、ただいたずらに、森の中へ溶けていくだけであった。

「う…う…ぐすん」

少女はまた、激痛が走る左足を引きずりながら、とぼとぼと歩き始めた。

「…なんだあれ？」

もちろん真はそんな少女の存在など知る由もなく、彼もまたヨネハの森を絶賛探検中であつた。

さて、おそらく誰もがこの言葉を聞いただけでは、真が何を見てしまったのかは分からないだろう。

しかし、真はまるで、そんな空気を読むがごとく、ちょうどいいタイミングで自らが遭遇してしまったものを言ってくれた。

「…ゴブリンだよな…あれ、絶対」

真は一樣、見つからないために、すぐそばにあつた木の陰に隠れながら、RPGの常連ともいふべきモンスターの名前を言った。

奇妙な長い耳、人間の鼻の3倍ぐらいでデカイ鼻、四本の指、一応ロボロボの赤い洋服を着ていて、武装として、はこぼれを起こしている剣を持っていた。

(…どうする)

真はそう思いながらゴブリンを見つめる。

幸いにもゴブリンは真の存在に気付いている様子はなく、のんびりボケーとしながら、とことこと歩いていった。

(ここは異世界だし、ゴブリンがいても別に不思議ではない、いや、むしろそれは当然のことかもしれない、しかし、どうするか…)

真が読んだ小説の中で登場するゴブリンは、大体は害のある雑魚モンスターとして登場するが、中には種族として、人間と共に暮らしていると言う設定の小説もあつたため、そして、一応日本人としての感性はあの謎の人物からの攻撃？から逃れたのか、ちゃんと残っており、そのため真は、いきなり出会いがしらにゴブリンを殺すことを躊躇していたのであつた。

(…マジでどうしよう、アイツが居るんじゃ、向こう側に行けな

いじゃないか)

実は真は、これまで何の目的もなくフラフラしていたわけでもない、ちゃんと森の中を歩きながら、川を探していたのである。

何故かと聞かれれば、川を見つけて下れば、もしかしたら人間の暮らしている町につけるかもしれないという希望的観測にしたがつて、真は、川を絶賛探していたのである。

そして、2時間探して、ようやく川を見つけたのだが、そこにとっせんぼうするがごとく、ゴブリンが居たのである。

「…あ！そうだ」

突然真は何か思いついたらしく、ゴブリンに気づかれないう、そうつぶやいた。

「…」

「ブン」

真はもしかしたら、さっきのウィンドウみたいに、ゴブリンのステータスを念じれば見れるかも知れないと思い、さっそくあのゴブリンのステータス現れろ！！てな感じにやってみた、そしたら案の定、ゴブリンのステータスが真の目の前にこれ又忽然と表示された。

ゴブリン

レベル5

初級モンスター

HP	30
MP	0

魔力	0
攻撃力	14
防御力	12
精神力	23
称号	なし
武術技	拾った剣を振り下ろす、ゴブリンパンチ
魔法技	なし
現在地	ハーストリア帝国 ヨネハの森林地帯
装備	はこぼれを起こした剣
道具	ぼろぼろの赤い服

次のレベルまで ？？？

(…ゴブリン俺より強えー！！！)

ステータスを見て、レベルが俺より上だし、攻撃力、防御力共に、明らかに真より強かったのであった。

(やっぱり俺って、初級モンスターとか言うゴブリンより弱いと言うことなのか…)

真はその事実に落胆しながらそう思った。

(…まあそれは仕方ないかな…俺は別に運動しているわけでもなく、帰宅部だし、剣を余裕で振り回すゴブリンよりか弱いのは当然のことかもしれないし)

しかし、そんなことを気にしていても川には渡れない、とりあえずこのゴブリンをどうするかを決めなくてはならなかった。

(…こうなったら、迂回するか、別にここを通らなくては川に行けないわけでもないし、無駄な争いは嫌だし、それに拳銃の弾だっ

てもったいない、ここは逃げるのが一番だな)

真はそんな感じに、迂回して川を目指すことに決定すると、さっそくそれを実行しようと思い、ゴ布林から一旦離れようとしたその時!!

「からん、かららん」

「…やべ」

ついつい、勢い余って、石を蹴ってしまうという、ありがちな展開を起こしてしまったのであった。

「…」

真はゴ布林の方向を恐る恐るゆっくりとむいてみた。

そしてそこには、そんなドジなことをやってしまった、真の姿を確認し、凝視するゴ布林の姿があったのであった。

「…ハロー、今日もいい天気ですね」

真はこのゴ布林が、もしかしたら人間にやさしいゴ布林だということを祈りながら、そして、苦笑いを行いながら、そう言った。

しかし、世の中日本の景気のように、うまくいかないのが常のように、真もまた、運に見放されたのであった。

「ぎゃー！ー！！」

そんな、真めがけて、ゴ布林が奇声を上げながら、なおかつ剣を振りかざし、真に迫ったのだった。

「はぁー、不運だぜこれは!!」

しかし真はいたって冷静だった、おそらく精神を弄られたからであろう、真もそのことにきづきながらも、皮肉げにこう呟いた。

「本当に不運だぜこんちくしょ!!」

真は銃など撃ったどころか、触ったことすらないのだが、精神が弄られた影響か、なんの問題もなく拳銃をゴブリンに構える。

「…魔法や剣ではなく、銃でゴブリンと戦う俺って、なんだか可笑しくね？」

何気なく真はそんなことを思いながらも、躊躇なく、引き金を引いた。

「ダン!!」

と、乾いた音が、森の中を響き渡った。

真は銃をもちろん撃ったこともなく、しかも、彼の今まで読んだ本に拳銃の使い方が書かれてあった物があったからこそ、キチンと打てるというありさまである。さらに、H&K USPは1867年以降に開発されたものであり、補正も効かないので、例え撃ったとしても命中率が最悪なはずであった、しかし、しかしである。

いわゆる真には、精神を弄られたおかげで、銃初心者によくある、恐怖心が全くなく、また、実戦のような極限状態に置かれてまったくもって冷静であったし、撃つと決めれば、それこそプロの兵隊のように、躊躇なく打つことができた。

しかも、ゴブリンの目には、真は全く武器らしき物を身につけていないと映ったのか、何も考えず、ただ単に自らが持っている剣で簡単に殺せると思い、ただ悠々と、完全に油断しながら、真に向かって走って行くだけであった。

そして、それらの要素が重なったうえ、どうやら運も良かったのか、拳銃の弾は見事、ゴブリンの頭を貫いていたのであった。

「や…」

そんな断末魔をゴブリンは叫び、頭から赤い血を流しながら、どさっと倒れ伏せ、そのまま動かなくなった。

「…銃を撃つても…そしてゴブリンみたいな人間に近い姿をした生き物を殺しても…何の罪悪感も湧かないとか…俺…おかしくねーか…」

人並みの大きさの生物を殺したにもかかわらず、そして何の躊躇もなく銃を撃つことを出来たそんな自分に、真は嫌悪感を感じ、銃を持っている右手をだらーんと垂らしながら、暗い気持ちで、とぼとぼと、頭部を撃ち抜かれたゴブリンの死体の横を歩き、川に向かった…。

「りーん、りーん、りーん」

「…だめだ、とても今日中に、人間のいそうな町に着くことなど、不可能だな」

真はあの後、川を下り、人間の町にたどりつくこと祈りながら、敗残兵が撤退するみたいにな、とぼとぼと川沿いを下ったのであった、幸いにも川の大きさが広いためか、川の隅は木などの障害物もなく、小石のみだったので、森のなかよりも断然歩きやすく、また、ゴブリンのようなモンスターにも会うことなどもなかった。

しかし、どうやら真はそう言った事に恵まれながらも、結局は人間の町に辿り着くことができないまま、夜を迎えてしまったのであった。

「…月が5つもあるな…」

異世界で定番の大量にある月を見ながら、真はそうつぶやくのであった。これもまた精神が弄られたためか、そして月が5つもあったても何故か明るさは元の世界と変わらないためか、別に取り乱すこともなく、のんびりと大量にある月を見ながら、そう呟くのであった。

「…ここで、野宿するしかないか」

はあー、と、ため息をつきながら、そう呟いた。

しかし、真はそんな現代日本の…悪く言えば毎日ベットで寝るのが当たり前なおぼっちゃまである、川のごつごつした岩の上で寝られるほど、真の体がしつかりとしているはずもない。

「…ぐぐ」

それに腹も減っていたのであった。

「はあー、とりあえず何か召喚しないと、特に今日は例年になく歩き回ったせいで、いつもに増して腹が減ったしな…」

というわけで真は、さっそく何を召喚すればいいのかを決めることにした。

「…これはよく考えなければ…いったい何を召喚すればちゃんとしたねどこも得ることもでき、なおかつ、食料を手に入れることができるかだ…」

うーん、と、真は考える人みたいに、頭を抱えながら、なにかそう言ったものを一気に召喚できる道があるはずだと思い、自らの記憶を探って行った。

「…そうだ!! 3カ月前ぐらいに、確か家族で、キャンプをした

時があったな、そしてその時の持ち物の中に、寝袋と、携行用のガスコンロと、小さなヤカンみたいな食器などと、10個ぐらいのカップラーメン入った、段ボールがあったはずだ…存在していたもの、つまり、今現在存在していない物でも召喚できるのなら、そう言うのだって召喚できるはず」

真は、そのことを思い出した自分に感心しながら、さっそく召喚して見ることにした。

（…どうか、召喚できますように）

真はそんなことを思いながらも、とりあえず必要かどうかは知らないが、よくわからない、召喚の構え？をした。

「…山崎真が告げる、キャンプ行った時にあった、引っ越しのサカイのマークのある段ボール箱を召喚せよ！！」

ずいぶん適当な感じに言ってしまったが、いくらなんでもそこまで詳細に思いだすことなどできるはずもなく、ただ、抜本的にそういううしかなかったのである。

しかし、どうやら真はちゃんとその段ボール箱の特徴を頭の中でイメージできたお陰か、「バ！！」という乾いた音と共に、真の目の前に忽然と、ワープしてきたかのように、引っ越しのサカイ印の段ボール箱が表れたのであった。

「…やべ、便利だわこの能力」

真は、素直にそんな感想抱いたのであった。

ゴブリンを拳銃で倒す話（後書き）

自分の作品を評価してくださった皆様、お気に入りに登録してくださった皆様、本当にありがとうございます。

これからも、自分の作品をぜひ楽しんでくださってください。

よくある美少女を助ける話（前書き）

至極簡単な、武器説明

H & K U S P

ドイツの銃器メーカーである、ヘッケラー&コッホ（H & Kとはこれを省略したものである）と呼ばれる会社が開発した自動拳銃である。

別名P 8と呼ばれている。

さらに詳しい説明は…各自で検索と言うことで。

よくある美少女を助ける話

「…」

「パチッ：パチッ」

「…まさか、暇つぶしに秋葉に行っただけなのに、今はこうして異世界でたき火を炊いて、カップラーメン食ってるとか…世の中どんなことがあこるか想像もできません」

自らが焚いた焚き火に照らされながら、真はもっともらしいことを、5つもある月をみながら、お月見の如くカップラーメンを食べながらそう言った。

「…カップラーメンで、なんで家で食うより、こうしてキャンプ的な感じで食べる方がうまいんだろう」

そんな永遠の謎を、真は暇つぶし的に呟くのだった。

ちなみに真がなぜに焚火などを焚いてるのかと言うと、一重に寒かったからである。

「…気温14度…昼は明らかに20度以上ぐらいはあったはずなのだが…これは寒すぎだろ」

段ボールの中に、何故かおまけ的に入っていた気温計を見ながら、今までの気温との、あり得ないほどの落差に、ため息をつきながら、そう思うのであった。

「…」

携行用のガスコンロで、ヤカンの中身が、ぐつぐつとお湯が沸いている様子を見ながら、真はこれからのことをどうすればいいのか、考えていた。

「…とりあえずは、当面の目標は、人に会うことだ、幸いこの世界がおそらくファンタジーな世界であることだけは、さっきのゴブリンの件で、証明済みだ」

可能性としては98%ぐらいかな？真はそんなことを思い、次に元の世界に戻るかどうかについて考え始めた。

「…大抵の異世界トリップ物の小説は…かなりの確率で、その住民になったり、自ら進んで住民になることを決意したりして、そのまま元の世界に帰らないまま、ファンタジーの世界でハッピーエンド、という感じで終わるから…俺もそうなるかもしれない」

真は、自らが読んでいた異世界トリップ物の本についての最終的展開を思い出しながらそう思った。

（…しかし、俺としては、元の世界に帰りたいよな、確かにこの能力は凄まじいほど便利だけど、やっぱり家族も友人もいて、そしてのんびりと平和に暮らしていた今までの日常の方が断然いい、一応、最終目標として、元の世界にけることを目標として掲げるか…）
真はそう思い、自らの目標は元の世界に帰ることだということを改めて決意し、同時に如何にして帰れるかを考えていた。

（…もしかしたら、この世界には、異世界を渡る魔法とかもあるかもしれない、今はそれに頼るしかないな…）
しかし、浮かんだのはそんな希望的観測な物だけであった。

「はあー、もしレベルが上がってそんなの出来るようになったらうれしいんだけど…いや待てよ、レベル？」

真は、そう言えば、もしかしたら自分のレベル、先ほどのゴブリンを倒したことにより、アップしているかもしれないと思い、すぐさま、自らのウィンドウを急いで開いてみた。

山崎 真 十七歳 桜坂高等学校二年生

レベル2

種族 人間

HP 15

MP 0

魔力 0

攻撃力 3

防御力 4

精神力 1000

称号 異世界召喚師

特性 近代兵器操作術 1868年

祝福 なし

武術技 なし

魔法技 なし

現在地 ハーストリア帝国 ゲベラルの川の畔

装備 H&K USP (9mm弾モデル) 残り弾数14

道具 ナップザック 食べかけのカップヌードル 木のはし、

携行用ガスコンロ 他

次のレベルまであと、 87

残り召喚数 1

「…これは…もしや…」

真は単にレベルが上がったことより、あるものが上がったことに歓喜していた。

「近代兵器操作術が、1867年から、1868年に上がってい

る!!」

真は、つい持っていた食べかけのカップヌードルを零し掛けるほど、歓喜したのであった。

（こっこれは…ものすごい発見だぜ、ホントマジで、もしかしてレベルが1上がるごとに、近代兵器操作術も一年単位で、上がっていくのではないか？）

レベルが1上がったことにより、近代兵器操作術が一年上がったことが証拠だと、真は思った。

「…だとしたら…ホント素晴らしいな!!」

これなら、地道にレベル上げをしていけば、最終的に、現代の兵器を操縦することが可能となれることを、真はそれこそ踊ってみたくなるほど歓喜しながら、確信したのであった。

「……………」

遠くに、人の声と、焚き火の音が、少女の耳に響いた。

「…焚き火…温かそう…」

その少女は、あの大けがを負った少女だった。

「…」

少女は意識がはつきりしていないのか、半ば無意識と言ってもいい感じに、真が焚く焚き火へと、まるで電灯に集まる虫のごとく、吸いこまれるようにフラフラと、歩いて行った。

「…はい？」

真は目の前で起きた出来事に、完全に、それこそ日本軍のカミカゼの攻撃にショックを受けた米軍のごとく、目の前の出来事が信じきれないような感じに、そう呟いたのであった。

なぜ真がそのようなことを言うのか、それは一重にこういうことであつた

「…いきなり森の中から青髪の美少女が表れたかと思ったら、いきなりその少女が俺の目の前で倒れ伏せるって、どんなフラグ？」
そう、真の目の前には、長距離走に力を使い果たしたようにいきなり森から表れたと思ったら、これまたいきなり倒れ伏せた超のつく美少女が居たのであった。しかもただの美少女ではない、来ている服も、何故だかぼろぼろであつた。

「…」

とりあえず、真はおそろおそろ、一応、なにやら苦しそうだったの
で、放っておけるはずもなく、このいきなり倒れ伏せた彼女の体を
調べてみた…読者の諸君、真は別にやましいことをしたいのではな
いのだよ、ただ彼女の体を見るだけ…残念ながらやましいな…

「…げ」

一応、精神を弄られたとしても、このような美少女の体を調べるの
はものすごく恥ずかしいのか、顔を赤めらせながら、彼は倒れてい
る彼女を、現状のような伏せている体制ではなく、キチンとした仰
向けの体制で寝かしてみることにした、すると…

「…随分と生々しい傷跡だな」

真の見つめる足の肘には、彼女のきめ細やかな白い肌には、まった
くもって似つかわしくない、今もなお、血を流し続けている、生々
しい傷跡であったのである、しかも、長時間ほったらかしにしてあ
った影響か、膿んでもいる、それにこの怪我ほどもないが、他に
も少女の体の所々に切り傷などがあった。

「…こいつは手当するしかないよな」

世界的にもお人好しの日本人、その上大のラノベファンである真は、
当然のことながら、少女を助けるために即座に行動するのであった。

（もったいないが、医療器具を召喚するか…いや医療器具とい
っても、この一般ピープルな俺にでもできるような治療法だなんて、
あんまりないんだけどな…）

しかし、まあ、そんな一般人にも簡単にできそうな治療でも、や
らないよりかはマシである、そう思った真は、さっそく召喚の構え
？に入った、

「山崎真が告げる、俺の部屋にある、救急箱を召喚せよ!!」
美少女助けることも手伝ってか、わざわざ仮面ライダーの変身を決めた時のような…そんなポーズを態々しながらそう叫ぶ彼…今の彼の姿は中二病にしか見えないのは作者だけなのだろうか。

しかしまあ、そんな振り付け関係なく、きちんと、それこそわが社は宅配を必ず時間ちょうどに完璧に届けてあげます、とか、そんなよくわからない例えのごとく。目の前に真の部屋にあった救急箱が召喚されたのであった。

「…さて、やりますか」

召喚された救急箱を見ながら、山崎真はそう呟いた。
ちなみに、寝袋が一つしかないと言う悲劇に気付くのは、この少女の治療が終わってからのことであった。

5つもある月がだんだんと薄くなり、異世界に、朝日が差し込んでくるのを、真は涙を流しながら、そんな美しい光景を見つめていた。

結局彼は、こんな怪我を負った美少女をそのまんま石の上で寝かせておけるはずもなく、自らが使う予定であつた寝袋を少女に使わせてあげたのであつた。

その反動とも言うべきか、もちろん寝袋は一つしかなく、必然的に彼は固いごつごつとした石の上で寝ることとなったのである。

しかし勿論のこと、石の上で真が寝られるはずもなく、しょうがないので、近くの森の中にあつた草木を抜き取り、下に引くことによって、石のごつごつした感触を和らげようとしたのだが、焼け石に水とはこのこと、そして日銀の円相場介入のごとく、まったく効果がなかった。しかし、かと言って焚火から離れた寒く、そして暗い森の中で寝れるはずもなく、結局真は不幸にも、一日中起きていたのであった。

⋮

それと彼を苦しめる要素がもう一つあった。

それはなにか、簡単なことである：目の前に無防備な超絶美少女が居るからであつた。

⋮

しかし、別に目の前に美少女が居たから、自らの男の本能を抑えるのに苦労したからではなく、別に意味の……そのような美少女が居ても、あんまりなにも感じない自分が居たことに真は苦しんでいたのであった。

「：ついに俺は男としての本能まで失ったか：こんな無防備な美少女が目の前にいるのに、近づいても精々顔が赤くなるだけだなんて」

[illegible]

まだ夜の寒さを残しているような風が、真を貫いたのであった。

「…」

真は少女の顔を見つめた。

夜の時も、もはや神に愛されまくっているのかと思うほどの造形美で雪のように白く、きめ細やかな顔は、焚火にあやしく照らされ、まるで焚火の明かりそのものが彼女の装飾品かのように彼女を美しく仕立て上げていたが、いまはそれ以上の美しい朝日が、彼女を照らし上げ、ただでさえ美しいのにさらに美しくしてなってしまうと言う悪循環？があり、普通の男なら直視できないか襲っちゃいそうになっちゃうほど美しかったのだが…

「…だめだ、精々クラスのかわいい女の子を見つめている程度にしかない…」

悲しいことに、精神を弄られてしまった真には、それ位にしか感じていなかったのもあった…それと同時に、こんな如何にもラノベ的展開になっているにもかかわらず、そんな風にしか思わない自分に、真は悲しくなってきたのであった…

「…そうだ、彼女のステータス、まだ見てなかったな」

真はそのことを思い出し、彼女のステータスをこっそり見ることにしてみた、べっべつにやましいことではない、この世界の人間の平均的な身体能力？を見てみるだけだと、真はだれもいないのにそんな言い訳を思っていた。

????????

17歳

??????

レベル26

種族 人間？

異常状態 身体の破損

HP	10 / 100
MP	10 / 1000
魔力	データがロックされています
攻撃力	18
防御力	23
精神力	12
称号	データが破損しています
特性	天才
祝福	データが破損しています
武術技	なし
魔法技	ファイアボール 探索マジック エレキビーム 他
現在地	ハーストリア帝国 ゲベラルの川の畔
武装	なし
装備	ボロボロの白いワンピース、ボロボロの赤いスカート 他

次のレベルまであと、データがロックされています

「…なにこれ？」
 真はそんな突込みどころ満載の、わけのわからないステータスを見ながら、そう呟かざる負えなかったのであった。

少女の正体

「…これはいったいどういう意味だ」

真はデータが損傷しているとか、訳の分からないことが書かれてあるこの少女のステータスを見ながら、
頭に？を浮かべていた。

（…あれか？この少女はラノベに有りがちな、謎の美少女とか、そんな感じな奴なのか？）

真は自分が今まで読んでいた本を元に、シャーロックホームズの劣化版みたいな感じにそう推理したのであった。

「…」

真はちょっとした沈黙の後、この少女の寝顔をもう一度食い見るような感じで見つめた。

（…だけどここはファンタジーな世界だから、他のパターンとして、この子が逃走中のお姫様とか、奴隷商人から逃げ出してきたとか、モンスターに襲われて逃げだしていたら、いつの間にか迷子になって、焚火の光と俺の声を聞きつけてやって来たとか、そういう展開もありそうだな）

そんなふうに一応、これから起こりそうなことを予想するため、ファンタジーにありがちなパターンのことを考えながら、真は、少女が目覚めるのを待っているのだった。

「…起きねーな」

真がファンタジーにありがちなことを考えていた頃から、1時間くらいたったころ、真はたまらずそう呟いた。

現代日本なら暇つぶしにゲームやら、本などがあるため、これぐらの時間ぐらい直ぐにたってしまうのだが、残念ながらここは異世界である、そんなものは存在しない、真もこの一時間、何度ゲームとかを本当に暇つぶしのために召喚しようかと思ったのだが、ようやく日の出とともに一気に回復した、3つしかない貴重な召喚数を無駄にはできないので、結局焚火に温まりながら、待っているしか、なかったのであった。

「…おーい、死んでるのか？」

息をしているのだから当然のごとく生きている少女に向かって、真は冗談げにそう言った。

「…おーいお姫様、起きてください」

真は少女の寝顔の前で手を振りながら起きるように促してみた。

「…すぴー…すぴー」

相変わらずそんなかわいらしい寝息を発しながら、真の声などまったく聞こえていないように、少女はかわいらしく寝ていた。

「はぁ…おーい、起きろー!!」

しかしこれ以上待つのは、さすがに耐えきれない真は、仕方ないので少女の体をゆすり動かしながら起こすことにした。だが：

「…だめだこりゃ」

しかし、まったくうんともすんとも言わない、まるで死んでいるかのように、少女は眠っていた。

「…ねこだまし！！」

「ぼん！！」

「…」

それでも起きなかった。

「おきろー！！朝だぞー！！」

大声で、しかも耳元で、真は叫んでみた。

「…すぴー」

しかし、真のそんな苦労をあざ笑うかのように、変わらずに寝ていたのであった。さながら、彼女を起こすのは、倒しても倒しても、何度でも湧いて出てくる敵を相手にしているかのようにもあった。

「…もしかして、わざとなのか？」

少女の反応を見ながら、普通、これ位したら直ぐ起きるはずであり、現に真は自らの母に猫だましを受け、目を覚ました経験もあってか、真がそう思ったのは無理なからぬことであった。

そしてこれが、のちの悲劇へと続く、フラグとも言うべきものであった。

「…にやり」

真は何か思いついたのか、近所の雷爺さん家にある柿の木から、柿をばれないようにとって盗むという、そんな今では絶滅した悪ガキのような笑みを浮かべ、すぐさま走って森の中へ行った。

数分後、少女の元へ戻ってきた真の手の中には、なにやら猫じゃらしみたいな物が握られていた。

「…ふふ、いいか、俺は悪くない、すべてはこの俺をあざ笑うかのように全く起きない貴女が悪いのである、よって、猫じゃらしの刑の処す」

真は小学生のころ、罰ゲームに猫じゃらしを鼻の中に突っ込み、くしゃみが出るまでくすぐっていたのを思い出し、子供心？的な感じにそれをすぐさま実行しようと思い、わざわざ森の中に生えていた猫じゃらしを持って来たのであった。

しかし、真はあることに気付かなかった、それはその植物が、見た目は確かに猫じゃらしみたいだが、中身は異世界独特のものだということに…

「…こちよこちよこちよこちよ」

そんなことなどつゆ知らずの真は、絶賛、心は少年時代に戻ってしまい、態々そんな擬音語を言いながら、如何にも悪ガキが浮かびそうな笑みで、一心不乱にかわいらしく寝ている少女の鼻の所を、擦ってみた。

「…はあ…はあ…はあ…」

数分間そうしていると、突然、少女の息遣いに変化が訪れた。

（よっしゃ、これは、くしゃみの前兆だな、ふふふ）

勿論そんな少女の反応を見て、真は勝ち誇ったような感じに、心の中にガッツポーズ浮かべていたのであった。

しかし、そんな余裕の笑みは、どんどん消えていくことになる。

「はあはあはあはあ」

「…」

「はあはあはあー」

「……………」

あれ？くしゃみしないナ…てかこの息遣い、どちらかと言うと興奮しているような…

真は明らかにおかしい息遣いに、ようやくそのことに気づいた。

「はあはあはあ、うんはああ」

やはり少女は興奮（性的な意味で）しているのだろうか、体全体が何だか火照ったように赤くなり、なお且つその声もまるで、下り坂を転がるボールのように、急転直下で、とてつもなく色っぽくなっていたのであった。

「はあはあはあはあうん…あん…」

（やばいやばいやばいやばいやばいやばいこれはやばい！！なんだか胸の中央あたりがとんがってきてるし、これ絶対に、アレだって、なんてエロゲ？的な、アッチの方向へ超音速の速さで突っ走ってるから！！…ってちくしょ！！こんな姿を見ても別にそこまでアレなことを何も感じないとか悲しいんだけど！！）

真はそんな少女の様子を見て、そして、それを見てもアレなことを

何も感じない自分を恨みながら

とりあえず、真は持っていた猫じゃらしを捨て、もう、何をすればいいのか分からないので、とりあえず、少女の体をゆすり動かした。

「ちょっと大丈夫か、大丈夫か、おい、とりあえず大丈夫か？」

どうやら、補正である高い精神力は、この時ばかりは発動しないのか、焦った声で真がそう言った。

「うんはあーもう、寝てなんかられにゃい！！」

がば！！と、まるで寝ぼけながら時計を見ると、やべ！！もう9時！！完全に遅刻じゃん、そんな感じに慌てて起きる学生みたいに、少女はその叫び声とともに、飛び起きた。

「…はあ…はあ…はあ」

「…」

起きた後も、何だか未だに眠たそうな感じで、いまだにちょっとばかり漏れる色っぽい声をあげながら、呆然と立ちくしている真を少女は見つめた。

「…あんたなのね…」

「へ？」

少女が突然上げたその呟きに、真は反応しきれず、そんな間抜けな声を発した。

「この変態！！」

「ぼん！！」

そんなすっきりした音が、平手打ちされた真のほより、発せられたのであった。

「…すいませんでした」
ビンタがクリーンヒットし、真っ赤に腫れてしまったほを、真は右手で抑えながら、まるで親の仇を見るかのような眼で見つめてくる、少女に対し、真は謝罪した。

「…まさか、媚薬草をそんな使い方をするだなんて…あなたの頭可笑しいわね」
容姿に似合わず、少女はそんな強気な言葉を真に向かって言い放った。

「…いやだからさ、俺、まさかその草が媚薬草だなんて分からなくてさ、不可抗力と言うか、俺さ、その植物は猫じゃらしかと思って、その…すいませんでした!!」
少女の鋭い視線を感じた真は、もはや土下座しかない、そう思った真は、へなへなと土下座をしたのであった。

「…まあいいわ、貴方からは下心を感じないし、それに、この毛布見たいな物、私にかぶせてくれたのは貴方なんでしょ？それに必死に私を看病してくれたのは、体の回復具合から直ぐに分かるし、貴方が看病してくれなかったら私は死んでいたのも事実だし、私も寝起きが凄まじく悪いのは自覚している、だから今回だけは許してあげるわ…感謝しなさいよ」

少女は、ため息をつきながら、そして土下座しながら謝る真を見たあと、そう言った。

「…あっありがとう」

その言葉を聞いた真は、一旦そう言ったあと、土下座の体制から解放され、キチンと座った体制で、少女と向かい合った。

「…はあー、もうこの話は忘れよう、思い出すのも恥ずかしいし…それと…余ってる服とかない？」

「…？」

真は、一瞬何でいきなり服を要求するんだろうと思ったが、少女の服装を見て、有ることを察した。

「ああ、服が破れたからか」

なるほど、服もボロボロだし、そのまんまじゃ恥ずかしいのだということを察し、真はそう言った。

「…俺のジャンパー、着るか？」

残念ながら、他に着るものなどないので、真は自分の着ていたジャンパーを差し出すことにした。

「…ありがとう」

そう言って、なぜか少女はちょっとばかり恥ずかしがりながら、真のジャンパーを受け取り、敗れたワンピースの上にかぶせるように

着始めた。

「…おっ俺の名前は山崎真、苗字が山崎で、名が真だ、君の名前は？」

その様子を見ながら、真はとりあえず、自己紹介だろうと思い、そういった。

「…ねえねえ、この私の傷口に張ってある物体は何なの？」
見事にスルーされた。

「…ああ、それは絆創膏という医療具だよ、俺の国にある足からの出血や傷口が外のほかの物と触れるのを防止するための道具さ、傷が治るまではっ付けといたほうがいいよ、大丈夫、害はない」

真はスルーされたことに落胆しながらも、もしかしたら、あまり言いたくないのでは？と思い、ちよつと間をおいた後、したかない、また後で聞くことにしようと思い、ふと浮かんだ絆創膏の説明を、この少女にしてあげた。

「…へー、バンソウコウね」

少女は物珍しそうに、絆創膏を恐る恐る触ってみた。

「…見たことのない素材でできてる…それに、こんな医療具見たことがない、面白いわねこれ、ねえねえ、貴方どこの国から来たの？」

「…」

真は一瞬その回答に迷ったが、異世界と言ってもいらぬ混乱を招くだけだと思い、こういうことにした。

「…ここから東にもものすごく遠く離れた、日本と言う国から来た」
わざわざ出身地を偽るため、仮想の国を作るよりか、この世界には存在しないが、本当に自らの出身地である国名を、真は言うことにした。

「…ニホン…聞いたこともないわね…よっぽど遠くにあるのかしら…」

彼女はそんなことを考えながらそう呟いていた。

「…まあいつか、それより、ねえねえ」

「…はい？」

「お腹が空いたから…その…食べ物くれない？」

ぐぐと少女のお腹が鳴り響いた。

「…何この食べ物？ラーベッチ…ではないね…良い匂いだけど、なんて言う食べ物なの？これ？」

カップラーメンの中身を無気味げに、少女は見つめた。

「…それは、カップラーメンと言う、俺の国の食べ物だ、口に合うかどうかは分からないけど、今のところ食料はそれしかないし、我慢してね」

ガーベッチという、謎の食べ物はおそらくラーメンに近い物だろうと思いながら、真は段ボールの中にあるはずの箸を探していた。

「あったあた、これを使って」

そう言って、真は箸を渡した。

「…これは、東の国が使っているとか言う2本棒…ごめんなさい…わたし、二本の棒は使えないのよ」

渡された箸を見ながら、少女はそう言った。

「そうか…それなら別に良いよ」

まあ、偶然転移した場所が、箸が使える地域だとは限らないし、そう思い、真はまた段ボールをあさり、中にあったキャンプの時よく

使うプラスチックでできたフォークを手渡した。

「じゃあ、フォークは？」

これならどうだ、そう思いながら真は言った。

「ありがとう、これなら使えるわ…ところで、このカップラーメンだっけ？とりあえず麺から先に食べればいいの？」

少女はフォークで麺を突きながら、そう言った。

「…まあ、ふつうはそうやって食べるかな、まあとりあえず、麺から食べてみてよ」

「…」

少女は麺を箸でくるくる巻いた後、よくテレビとかで、ラーメンを食べたことのない外国人が、麺を日本人見たいに吸うことができず、巻いた麺をそのまま口に運んで噛み切ったように、少女もそのようにして食べたのであった。

「…っ！！おいしい」

少女はそう言った後、すぐさま、また麺をくるくる巻きつけると、何故か震えた手つきで食べ始めた。

「…おいしい、何これ美味すぎる、魔法を使った形跡もないのに、こんなに美味しいだなんて…」

そんなことをいいながら、よほど腹が減っているのか、それともあまりにも美味しさのせいなのか、少女はがむしゃらに、カップラーメンを食べていた。

「…」

とりあえずどうしようか、真はがむしゃらにカップラーメンを食べている少女を見ながら、そう思った。

（…とりあえず、今まで少女のペースで流されてしまった感のある自己紹介をすべきだろう）

如何思った真は、とりあえず少女が食べ終わるのを待ち、その後自

己紹介しようと思ったのであった。

「ああっ美味しかった、貴方の国ってどうかしてるわ、魔法なしでこんな美味しいものを食べれるだなんて、ねえねえ、おかわりある？」

いつの間にか、食いしん坊キャラとなってしまうっている少女を見ながら、真はとりあえず、先ほど考えた自己紹介をすることにした。

「…なあ、とりあえず自己紹介ぐらいはしようぜ、未だに俺さつき紹介したまんま君の名前も分らないしさ、とりあえず、俺の名前は山崎真、苗字が山崎で、名が真だ」
真は一応、もう一度自分の名前を言いながら、少女に自らの名を言うように目線で促した。

「…自己紹介ね…」

少女はなんだか暗い顔を始めた。

「…なんだ？言えない名前なのか？」

逃げ出した、王女様ならそんなこともあり得ると、真はいつの間にかそれが前提と言う中二的な思考になりながら、そんなことを言ったのであった。

「…いや、そういうわけじゃないのよ…」

「…じゃあ、なんなんだよ」

違うのか、じゃあ他の、奴隷商人から逃げ出したとかそういうのかな、と真はそんなありがちな展開をまたもや思っていた。

「…その…」

その言葉の後…少女は予想外の爆弾発言をした。

「自分が誰だか…分からないのよ…名前も、今までのことも」
空になったカップラーメンの用器をフォークで突つつきながら、名
のない少女は、そう呟いた。

記憶と心を取り戻す覚悟

「…なるほどね…自分が誰で、そして自分が今まで何をしていたのかも覚えていない、詰まり、記憶喪失って奴か…」

先ほどの少女の発言に、真はかなり驚き、その後少女の詳しい説明を聞いたあと、そう言った

「…うん…だけど、自分のこと以外は思い出せるの、いわゆる一般常識とかは覚えてるんだけどね、言葉だってキッチンとしゃべれるし、世界の国々や、食べ物の名前なんかも、キッチンと分かるし、自分のことが分からない以外は、日常生活に支障は出ないしね」

名を失ってしまった少女は、悲しそうな目で地面を見つめながら、そう言った。

「…そうか…」

まさか記憶喪失とは思っていなかった真は、そんな悲しそうな顔をしている彼女の顔を見ていた。

「…」

「…」

「パチッパチッ」

真たちは何だか気まずくなり、焚き火の音だけが鳴る、沈黙が訪れた。

（記憶喪失か…この人の顔を見てみると、ホント、ドラマで見るのとは全く違うということがわかるよな…）

真は、記憶喪失と言われても、そんなもの、物語の中でしか見たことがなかった、だから、お世辞にもそのようなものが身近にあるとは言いがたいものであった。

だが…いまは違う、現実的に、自らのすぐそばにいる少女が記憶喪失なのである。

「…」

真は自分がもし彼女と同じような記憶喪失になったような気持ちを思い浮かべてみた。

自分の名前が分からない…その間隔はなんだかまるで、世界が現実の世界でなくなるような感触、そして暗転とした心、強い不安、まるで車酔いを起こしてしまった自分が、無理やりコインロッカーの中へ詰め込まれ、ぐるんぐるんと高速回転されてしまうような、そんな考えたくもない感触…

「…」

真は少女を見つめた、今の精神力を持っている真でも、つい鳥肌が立ってしまうような、そんな恐ろしい感覚を、この少女が実体験しているのかと思った。

だが…

それ以降はなぜか何も感じなかった、それしか、真は感じなかった。この子が可哀そうだとか、哀れだとか、慰めてあげようとか、そう言った本来は起きるはずであった感情が起きないのであった、精神が弄られたせいなのだろう。

「…ちっ」

そのような当たり前に起こるはずの感情が湧かない…そんな自分に腹が立つし、まるで心が自分の物じゃないみたいで、気分が悪くな

りそうでもあった。

「…あ」

そのとき、真の頭の中にある言葉が浮かんだ、何の感情も抱かない自分の心に喧嘩を売ってやろうとも思ったかもしれないそんな言葉を、そして自分をこんな心にしてしまった奴に、仕返ししてやろうと…その自らの憎ったらしい心を、逆に利用してすることで…普段の自分なら恐らく浮かんでも実行できないような言葉を…元の世界では、浮かんでも絶対に恥ずかしくて言えそうにない言葉を言うことができた。

「じゃあさ…俺と一緒に、お前の記憶を探しに行く、旅でもしようぜ」

そんな現代日本において、クラスメイトに告白するぐらい勇気のいる言葉を、真は、憎らしい自らの心を利用することによって、躊躇うこともなく、言うことができたのであった。

そしてその言葉は、何も感じない自分の心への、真自身の意識による抵抗だったのかもしれない。

「……私の記憶を探す旅？」

少女は驚いたような顔で、そんなことを言う真の顔見つめた。

「そう、おまえさあ、どうせこのままじゃ一人だろう、ただでさえ記憶喪失で大変なのによ、一人だったら絶対に大変だ、それに、俺もちょっとばかり旅の仲間も募集していたところなんだ…ここで会ったのも何かの縁だし、俺も別に目的と言っても、故郷に帰るぐらいしかないし、ちょっとぐらい寄り道しても変らん、さらにだ、俺はここら辺にある国こととか、仕組みやら文化のこととか、まったく言っていないほどよく知らないんだよ、だからな、お前なら、ここら辺に国のこととか詳しいだろう、だからさ」

真は言った、

「その見返りとして、記憶喪失のことでお前の心が苦しくなったら、その心を支える柱として、俺が支えてやる、記憶を探しきるまで……だから、俺と一緒に旅に行こうぜ」

笑顔で、おそらく、ラノベ的展開になりたいとか、そんなものではなく、本心で、この子と一緒に旅がしたいと……

「……」

「……」

「……ふふふ」

「……へ？」

少女は突然、その鈴のような声で、笑い始めた。

「フッフあはははは、貴方って面白いね、会って一日もたってない人にそんなことを言うだなんて」

「……」

真は沈黙していた。

「でもね」

少女はそんな様子の真を見ながら、笑顔で言った。

「私、実は怖かったの、いままで真になんとか強気な姿勢で言っていたけれど、やっぱりさ、自分が誰なのかも分からないってものすごく怖くって、自分が今まで何をしていたのかも分からないのだから……それってやっぱり怖いよね、だって、もしかしたら私、記憶失う前の私は、大量殺人犯なのかもしれない、そう思うと、耐えられないぐらい怖くって」

少女は下を向きなら、そして、おそらくその言葉を感情的に強く言

ってしまった影響だろうか、いつの間にか少女は涙を流していた。

「…だからね…大げさかもしれないけど、嬉しかったの、貴方のそのつい笑っちゃいそうな言葉が…貴方が私のその可笑しくなりそう心を支えてくれるというその言葉が…」

真は、彼女のその言葉を聞きながら、なんだか自分の心が溶けていくような感じで…だんだんと…真の心がちょっとだけ、自分の物に戻ってくるような感触がした。

「いいわよ、真、あなたと一緒に旅に出ても」

真は、その言葉を聞いたあと、良かったと思ったが。

「…だけどね…ちょっとだけ条件があるの」

少女はかわいげな笑顔で、そう言った。

「貴方に、私の名前を決めてほしいの、この可笑しくて、倒れてしまいそうな心を、支えてくれるあなたが…私の心を支える為の、柱を作ってほしいの」

「…」

真は、未だに目を涙で濡らしている少女の顔見ながら、自然と、まるでそれが常識かのように、彼女の名前を考えた。

「…」

真が見つめる少女のその顔には、未だに渴いていない涙を含んだ、美しい澄んだ空のような瞳と、そして、そこに垂れかかる淡い、まるで宇宙から見た地球のように青い髪…

「…」

真はふと空を見上げた、排気ガスとか、そんな空を汚すものがない世界にある、澄んだ青空、その空はまるで、目の前にいる名を失ってしまった少女その物のような感じがした。

「…ソラ」

真が言った

「青空のように美しい瞳と髪を持っている君にちなんだ ソラ、という名前はどうだ？」

真は少女に向かって問いかけた。

「…うん」

少女は答えた

「私の名前はソラ、真と一緒に旅する者、よろしくね」
少女の顔には、もう涙はなく、名前と言う支えを持った、美しく可愛らしい、青空のような笑みが浮かんでいた。

その少女の笑顔を見ながら、真はこれからの旅について思いをはせていた、少女の記憶を取り戻す旅…そして、自らの心を取り戻すための、旅に…

記憶と心を取り戻す覚悟（後書き）

批判、称賛問わず、感想&評価を頂けると、作者はパワーアップします。

たぶん

「…いや…チョットな…異世界に転移した疲れが、ここで溜まってきたトオモウ」

真は、冷や汗をかきながら、そんな苦しまぎれの言い訳を言っていた。

あのあと、真は自らが異世界と言うこの世界とは全く別の世界からやってきたということを明かし、ここに至る経緯まで伝えた、初めは信じてくれないかもしれないと思った真であったが、案の定ソラは呆気ないほど簡単に納得してくれた、どうやらカップラーメンがあまりにも異常だったかららしい。

「…ふふーん、騙されないわよ、そんなことぐらい演技だってことぐらい直ぐに分かつちゃうんだから」

どうやらばればれたらしい

「…何故ばれた」

「私はね、こう見ても勘が鋭いのよ、何故だか全然分かんないけどね、…まあいいわ、休憩しましょ」

そう言って、ソラは真の横に座った。

ひゅー

そんな涼しげな風が、座っている二人を包み込むように、吹いたのであった。

「…」

真は、さっきのソラの言葉から、自分はこの世界で生きていけるのか？もしかしたら明日には死んでいるのかもしれない、とそんなことを心配げに思っていたのであった。

「…なあ、ソラって強いのか？その、戦闘とかさ」

自分よりかなり勇ましそうな彼女に、真はそんな情けないことを言っていた。

「…うん…よく分かんない、記憶ないから、今私が使える魔法から考えるに、残念だけど、私は弱いね」

ソラはなんだかふてくされた様な顔でそう言った

「…具体的にどんな魔法が使えるんだ？」

そう、この言葉から分かる通りに、この世界にはあのウインドウズが書かれてあった通りに魔法があるのである。ちなみに真が自分は使えるかとソラに聞いてみたら、魔力ある？と聞いてきたので、ないと答えたら、そんな使えるわけじゃないじゃん、とけらけら笑われたのは真のちょっとしたトラウマである。

「うん…攻撃的な系統の火系統はファイアボールと超初級の手から火を出すことだけ、水系統は、ちょっとしたヒーリング位しか使えないし、一番得意の風系統は人の気配を感知する、探索マジックと、人を吹き飛ばす突風を吹かせるぐらい、土系統は、錬金だけかな…合わせ技として、風と土で、砂ぼこりのちょっとした竜巻ぐらいかしらね、ちなみに光とか闇とかは全く使えませうん、ランクで言えば、Fね」

ちなみに、魔法には次の系統があるらしく、火、水、風、土、光、闇、とあり、個人差があるらしく、大抵はどれか一つがとても上手くて、他の系統は微妙、もしくは苦手が多く、また、まったく才能がなく、魔法を使えない人もいれば、全部を極めた人もいるらしい、火、水、風、土、は魔法に才能がある人ならだれでも使えるらしく、逆に、光、闇、は、使える人は少ない。あと、魔法が使える者にはランクづけがあり、最低ランクのGからSSSまでであるらしい。もちろん真はG以下である。

「…」

真はファンタジーについても結構詳しいので、これらの魔法の意味は大体は分かった、だけど…もうちょっと強くてもいいのでは…とソラではなく空を見ながら思っていた…

「…なあ、魔法ってどうやったらうまく使えるようになるんだ？」

いくら精神を弄られたと言っても、死にたくないという気持ちはあるので、これぐらいの魔法では心配になってしまった真はそう言った。

「…うん…魔法って言うのはね、想像力で決まるのよ、例えば竜巻をうまく作りたいときには、風魔法の呪文を言った後、風魔法の魔法陣を出し、竜巻が回るのを思い浮かべながら、体内にある魔力を外に出し、その魔力で竜巻が回る仕組みを思い浮かべながら、魔力を思い浮かべたとおりに回らせるための呪文を言った後、発生するのよ、まあ、一番手っ取り早いのは、魔法具とかを使えばいいんだけど、魔法具なんてないし、高いし使い捨てが多いから、やめた方がいいよ」

ソラは、魔法のことがわからない真のために、分かりやすくそう言った。

「…うん…つまり…魔法は魔法具を使えば簡単に強くなれるが、効率が悪くて使わない方がいい…これは分かる、他に通常での魔法の強化は想像力が大切で、たとえば竜巻を起こすためには、竜巻の仕組みを思い浮かべながら呪文を唱えると発生すると言う感じか」

（…さてよ）

真は急に自らの頭の中にひらめいたものがあり、ついそう言った。

「…なあソラ、お前竜巻ってどんな自然現象なのか、分かるのか？」

「え…どんな自然現象かって？…うん…風が、くるくる回るような、そんな感じ？」

「…」

なるほど、と真はそう思った、この世界の人たちは上昇気流とか、下降気流なんていう、詳しい自然現象とかを知らないんだと、そし

てそれは、自らの異世界の、進んだ科学技術により解明された竜巻に関する詳しい知識によって、影響を与えることができるということを…

「…なあ、竜巻は元となる雲があつて、その雲が上昇気流を起こして雲の下を空気を吸い上げ、天候が乱れると空気の流れが重なって渦巻きを作る、この渦巻きが集まってくると、回る速さは一層早くなり、下にあるものを吸い上げる、これが竜巻の仕組み…こんな話聞いたことがあるか？」

真は、どこかの小説にそんなことが書いてあつたのを思い出し、竜巻のちよつとした知識を披露した。

「…え、なにそれ？…ちよつと詳しく教えて！！」

ソラはどうやら、その説明に興味が湧いたらしく、慌てながらそう言った。

そして、結局竜巻に関する本を召喚するはめになったのは、当然のことであつた。

「…へー、このリカノキョウカシヨと言うのは、凄いものね、魔法も使わずにこのような綺麗な絵を長期間、これまた高品質な紙に写してあるだなんて…字が分からないのが悔しいな…」

真が昔使っていた小学校の理科の教科書を見ながら、ソラは言った。

ちなみに、言葉や言語の問題についてはすでに答えが出ており、会話はちゃんとできているは今までの分かるが、文字を読むことに關しては少し違うらしく、真はこの世界の文字を何故か読むこと

ができるが、この世界の人、ソラみたいな人は、真の世界の文字を読むことができないであった：何か中途半端だな、どうせならこっちの世界の人間も俺の世界の文字が読めるようにすればいいのに、真はそんなどうにもなりそうにない愚痴を言っていたのであった。

「：いちいち、真に翻訳してもらっても不便だし、こうなったら：」
ソラは何を思ったのか、突如こう宣言した。

「真!！」

「なんだ？」

「私に、ニホンゴ教えて」

「：なんで」

「真の世界の書物は、私たちの世界に比べたらとてつもなく進んでいるのよ、絵を見るだけでわかる、それに私、真の世界に興味が出てきたし、これからも真の世界の文字を読むことだってあるかもしれないじゃない、だから、お願い、教えて」

ソラは、手を組みながら、真にねだるように言った。

「：いいけど、だけど日本語って確か俺の世界でも最も難しい言語の一つだぜ、そんな簡単にできるのか？」

真は、この世界の文字をなぜか理解することができるため、日本語を教えることも出来なくてもいいが、一応、世界の中でもトップクラスに難しいと言われている日本語をちゃんとソラが覚えてくれるかどうか、不安だったため、そう言った。

「大丈夫、私、頑張るから」

ソラは決意のこもった顔で、そう言った。

「：日本語には確か、漢字と平仮名と片仮名とアラビア数字とアル

ファベットと、かなり大量の文字が使われてるけど、大丈夫か」
まだ心配な真は最後の抵抗をした。

「…大丈夫大丈夫だって、ほら、まずは先生、言葉の基礎から」
笑顔でそういうソラ、結局俺た真はこれから日本語をソラに対して
教えることとなった。

ちなみに今日だけで平仮名の発音と書くことができてしまったこ
とには、真は眼をくりぬくほど驚き。

そして、彼女のステータスに天才と書かれていたことを思い出し、
妙に納得した真であった。

スクーターとドラム缶風呂（前書き）

至極簡単な自己紹介

ソラ

一応この物語のヒロインである。

森の中で傷を負い、拳句の果てに記憶を失った、如何にもな可哀そうなヒロインである、性格としては、少々いたずら心があり過ぎる所が難点らしい。

得意な魔法は名前的に如何にもな風系統である。

好きなものは、今のところカップラーメン、現代日本の科学的知識らしい。

スクーターとドラム缶風呂

「…」

「どうしたの真？ そんな今にも疲労でぶっ倒れそうな顔？ 足が震えてるわよ」

「…何でもない、精神的には疲れてないしな」

あ…足が…足が筋肉痛で動けねー、大体、三日間連続で長距離を歩くだなんてきつ過ぎる！！ 真は旅立ちの日から、三日が立った昼前、筋肉痛で痛んだり、震えたりする足を引きずりながら、心の底からそう思ったのであった。

この三日間、幸いにもやれモンスターに襲われたとか、やれ盗賊に襲われたとか、そんなこともなかったことだけが、真にとって幸いだったであろう、しかしそれでも、運動不足で帰宅部の真にとって、肉体的に、体力的に、段々と、それこそドリルで削られていくがごとし減って行ったのであった。皮肉なことに、弄られたおかげで、精神的には大丈夫だけど。

「…こうなったら」

真はついにある考えを実行することにしたのであった。

「…ん？ どうしたの真」

ソラがその言葉に反応した。

「…移動手段として、なんか召喚しよう」

真はついに重要？ なことを決断した。

真は今まで、何度となく、現代にある乗り物を召喚しようと思っ

た時があつた、ただでさえ重たい荷物を思っている真にとって、そう思うのは当然のことであつたが：まあ、それは、緊急事態に備えるための、召喚数を出来るだけ減らしてはいけないというソラと決めた方針で、そして、横ですがすがしい顔で歩いているソラに負けたくない気持ちもあつてか、結局今まで召喚することがなかったのであつた。まあ、精神的には疲れていなかったこそだったのかもしれないが。

「ソラ、車召喚しても大丈夫かな？」

真は一応、現代的な交通手段で、操縦したことがあるのは、自転車、そして、スクーター位な物であつた、ちなみに、スクーターは鈴木という真の友達その？から借りたもので、勿論無免許運転である、まあ、青春した勢いでやってしまったのであろう。

「：クルマ？ああ、確か馬なし鉄馬車のことね」

ファンタジーの人が言いそうな名称である。

「だけど、確かクルマだっけ？真そのことを話した時に、自分では運転できないとか、言っていたような気がするんだけど：」

「：いや、一応カタログとか：そう言う、車の運転の仕方が乗っている雑誌なんかを召喚すればいいかなつと：」

真は、そんな車をなめてるとしか言いようのないことを言っていた。元の世界なら補導されても可笑しくない奴である。

「：うん：やめといった方がいいよ、多分真がクルマを運転するのって、どうせ、初心者が馬車を運転するのに等しい行為なんでしょ、やめた方が良いわ、それに、この先狭い道なんかもあるから、図体のでかいクルマなんかは通るのは難しいし、それに、人のいる場所に行ったらどうしようもなく目立つから、大変になるし、馬車よりも大きい鉄の箱が、更に馬車よりも数倍のスピードで走ってたら、何も知らない人にとってみれば、恐怖そのものよ、最悪、討伐対象にされるかも」

結局、クルマはやめた方がいいという結論に達した。

「じゃあ、バイクはどうだ？」

真は携帯にある、バイクの写真を見せながら言った。

「うん…これも目立つわね、いい、私たちは、あまり戦闘能力が高くないの、こんな目立つもの持ってたら、盗賊に物珍しがられ、襲われる確率が高くなるかも、もっと地味なもの…」

「…じゃあ、スクーターなんかどうだ？」

真はランクをさらに下げてみた。その光景は築地市場の競りみたいでもあった、と思うのは作者だけなのかも。

「…うん…これも結構目立つけど、これならギリギリ許容範囲かも、後はこのバイクに、地味な色を塗っとけば、更に許容範囲が増すかも」

どうやら、ようやくソラの許容範囲とやらに引っ掛かったみたいである。

「…よし、これでいいな」

真は、ソラに再度確認した。

「うん良いよ、それに、これ以下だと、ゲンツキ？だったけ、あれじゃあ私もちよっと頼りないかも、スクーターが最良かもね」

世界の原付ファンに喧嘩を売ったソラであった。

「よし、じゃあ召喚するか」

ちなみに、現在の真の召喚数は5、である。

真が今まで過ごした中で、気づいたことが一つだけあった、それは、一日で三つのある召喚数を使いきれなかった場合、その召喚数は、明日へと引き継がれるということである。

真は、このことに気づいた時、よかったと、ため息をついたものである。

「山崎真が告げる、スクーターを召喚せよ」

ちなみに、召喚する方法についても、理解しつつあった。

召喚するには、やっぱり想像力は欠かせなく、自らが実際に触ったり、見たことがあるものなら、固有名詞を言わなくとも、あの時の、キャンプの時に持っていた引越しのサカイ印の段ボール箱のように、召喚できたが、例えば、写真のみでしか見たことがなかった物の場合、やはり、ちゃんとした固有名詞を言わなければだめみたいであった。

そして、今回召喚するスクーターは真自身が鈴木より借りたスクーターそのものを召喚するため、詳しい固有名詞とかは言わなかったのであった。

ばー！と乾いた音と共に、銀色のスクーターが忽然と現れたのであった。

ちなみに、二人の乗りのスクーターである。

「…いつも思うけど、真って」

凄いよね、と言うのかと、真は思ったのだが

「この能力が無かったら脳なしよね」

ごもつともな発言がなされたのであった。

「…ひっで…」

こんなにひどいことを言われたのに、傷付かない心、とりあえず悲しいなど、思った真であった。

「フッフ、冗談よ冗談、さ、乗りましょう、真」

「…驚かせるなよ、まったく」

どうもソラはからかい癖が有るようだと言真は思いながら、燃料がち

やんと満タンなのかどうかを確認し、召喚した際にどっか可笑しくなった所がないかどうかを確認した後、自らが今まで背負っていた荷物をバランスをちゃんと取れるように両方にくりつけた後、真はソラに言った。

「よし、乗れソラ」

「うん」

真の呼びかけにこたえてソラがそう言うのと、真の後ろに、ソラが座った。

「よし、じゃあ行くか」

真は、一応、鈴木と一緒にこのバイクで二人乗りをした経験があるため、一応二人乗りはしたことがあるが、それは遊びでのことであって、実は公道とかを真はスクーターを使って走ったことがなかったものであった、そこまでスクーターの運転に慣れていなかったこともある、まあ、鈴木によるスクーター操縦法の真への伝授によって、何とか運転できるのが、現在の真の現状である。

（ちゃんと運転できるかな俺・・・）

そのためか、真はちゃんと走れるかどうか不安に襲われながらも、真は、スクーターのエンジンをかけた。

「ブロロロロロロ」

「おお、すごい！本当に生き物見たいに動くんだ、不思議」
後ろに乗っているソラが動き出したスクーターを見ながら、鈴のような美しい笑い声でそう言った。

「…」

その光景を見ながら、真はあることを思い出していた。

それは、鈴木が確かこのスクーターを、一生懸命バイトしてまで買ったのは、彼女を後ろに乗せて走ってみたいと言う、願望から来たからである、まあ、結局の真が借りるまでにその彼女とやらを乗せたことはなかったみたいだが…まあ、乗せる彼女が居なかったのだろう、と真は思っていたのであった。

「…」

そして、真はそのことを思い出しながらこう思った。

（すまぬ鈴木）　と…

「さっさっ、速く走ってみてよ!!」

目をきらきら輝かせながら、ソラが真に言った。

「へいへい、行きますすぜ」

「ブロロロロロロ」

「わ!すごい!本当に魔法なしで走るなんて、面白い!」

おそらく、現代人に例えられるなら、UFOに特別に乗れた時とみた
いなんだな…と、真は喜ぶソラを見ながらそう思った。

「ブロロロロロロ」

それから、数分後、スクーターは時速50キロの速さで走行していた。
た。

「ヒyah——!!真!!このすくーたーて乗り物、想像以上に

早いじゃない：ってあれ真大丈夫」

「：ちよ：危ないからマジで、運転に集中しとるから、話しかけないでよ：」

彼は現在、召喚したてほやほやのスクーターにて、異世界の大地を走行していたのであった。

異世界の大地を美少女と一緒にスクーターでさっそうと駆け抜ける、世の男子にとって夢のような話だが、真のこの言葉から察するに、あまり余裕はなさそうである。

なぜか：理由は簡単である、真は後ろに大量の荷物をのっけながらオートバイを運転したことなどないのであったから、やはり想像通りと言うか、無免許運転の天罰と言うか、やはり、不安定な走行だったのであった、例えて言うならば、二人乗りの自転車で坂道を上がるような感じだろう、普通ならどうしても不安定になってしまい、まともな運転などできない、今まで運転できたのも、はつきり言って、精神を弄られてたからである。普通なら怖くて怖くて運転できない。

「もう、そんな卑屈になってないで、ほら、真が自慢してた、りょうてばなし運転とか言うのしてみなさいよ」

ソラがさりげなく恐ろしいことを言う

「ッ！！いやソラ、それは自転車のこと：」

「えい！！」

気づいたら、ソラの白い手によって真は強制的に両手手放し運転をしていた。

「：ッ！！」

真はゴブリンの時すら感じえなかった恐怖を感じながらも、自らの体を駆使し、バランスを保っていた、おそらく生存本能とも言えるのだろう。

「…ねえ、真、両手放し運転で、結局どこら辺がすごいのか？」

おそらく、自転車の手放し運転すら知らないソラにとってごくあたりまえな言葉だったであろう。

「…いいかソラ」

そんなソラに真は心臓をこれでもかと言うほど心臓をばくばくさせながら、ソラに言った。

「いますぐ、俺の手を離して」

無理やり離すとバランスを崩すので、真は小さな声で言った。

「…なんで？」

「いいから早く話してください、お願いします」

「…」

「…」

ちよつとばかりの沈黙が訪れた

「…ふふん、やなこった」

おそらく現状の恐ろしさを理解できていないのだろう、それだからこそ生まれる、ちよつとばかりふざけ心から、生まれた笑顔でそう言った。

「…」

その美しい笑顔が、悪魔の微笑みに見えた真であった。

「りーんりーんりーん」

そんなことをしていると、いつの間にか夕方になり、そして異世界でも定番らしい、夕方の虫の声が聞こえてきた。

「あー面白かった、速度も馬車並みに速いし、それに疲れないからずっとその速度を維持してられる、凄いわねホント、食べ物食べないから食費もかからないし：あっそう言えばがそりんと言うのを食べるんだっただけそれ」

ソラが満足げにふと真にそう話しかけた。

「：いや：ゴブリンとの命をがけの戦いするときにも感じなかったはずの恐怖心が、まさか、このような形で感じるとは：もし、精神弄られていなかったら冷静でいられず、終わってただろうな：」

両手放しという、見つかったら即刻逮捕されそうな暴挙をした真は、しかし、精神的には疲れていないため、屍にはなってはいなかったが、肉体的には疲れたようで、真はスクーターの前で倒れ伏せていたのであった。

「：もう真！人の話をちゃんと聞いて！せっかくこんな面白いこと体験したんだし、もっと張り切っていこうよ！」

ソラは倒れ伏せたい真の頭をたたきながらそう言った、その姿は、クラスの女子たちが、ちょっとした事だけでありえないほどテンションアップするように、この世界の女子もテンションアップしたら手がつけられないほどテンションアップしたのであった。

「もう、ほら地べたになんか寝そべってないで、ちゃんと立ちなさい！」

「分かった！分かったからわざわざ引っぱらないでくれ！」

しかし、真は現在体力的に疲れ、まるで、予想外なくらいテストの点数が低かった時のごとくテンションがダウンしており、その彼らの温度差に、まるで今すぐにでも台風でも発生するではないかと思ってしまうほどだ。

「ほら、さっさと、起きて起きて、それと、ニホンゴの続き…ちゃんと今日もしてもらおうよ」

ソラはチョット悪だくみを浮かべたように、にっこり笑いながらそう言った。

「…ちょッ…もう今日は疲れたんだけど…勘弁してくれ」

真は本当にマジで疲れたので、それだけは勘弁してくれとお願いした。

「だめ…早く私もニホンゴを理解したいんだから、ほら、机代わりの段ボール出して」

まずい、と真は思った、このままでは、疲れて死んでしまうと…

「…」

しかし、これといった言い訳は…ついに浮かぶこともなく

「ほら、準備完了」

いつの間にか勉強の準備を完了した空が目の前にいたのであった。

「…ああ、せめて風呂に入ってすっきりしたいな…」

真はついそんなこと言ってしまっていたのであった

(ッ!?! までよ風呂?)

「そうだ!! 風呂に入ろう!!」

「へ? フロ?」

真は話を強制的にずらすべく、そう言ったのであった。

真がこの世界に来てから今までに気づいたことが一つだけあった、それは体が老廃物等で中々汚れないことである、この世界に来てから、風呂に入るなんて余裕がなかった真は、一番そのことを気にし

ていたのだが、そのことに気づき、ソラに質問してみたところ、どうやらこの世界では成長期まっ盛りの奴でも、一週間に一回にでも水浴びなどをすることによって、清潔な体を保っていられるらしい、何故かはわからないが：

とりあえずはこの世界にいる限り、元の世界のように毎日風呂に入らなくては清潔でいられないということはなく、別段問題はなかったのだが、やっぱり日本人として：毎日風呂に入るのが日課な真にとって、たとえ体の汚れを落とす意味がなくても、やはり風呂に入りたい気持でいたのである。

「…へー、このドラムカン？て言うのに水を入れて、温めた後入るんだ：面白そうね」

ちなみに、この世界にもお風呂という習慣はあるらしいが、大体が貴族とかいう特権階級？の奴らや、金持ちしか入れないらしい、まあ、体を洗うぐらいなら、魔法でもできるからそこまで流行らないだけなのかもしれないと、真はドラムカン風呂の準備をしながら、そんなことを思っていた。

実は以前真は、ドラム缶風呂に入ったことがあるのであった、中学生のころ、自らの祖父が用意してくれて、入ったのである、そのため、それをそのまま召喚すれば、余裕で風呂に入れるのであった。

「よし、これでよし」

一様召喚したドラム缶風呂に支障はないかチェックした後、真は確かめるようにそう言った。

「ふふ、では入るとするか」

真は今から入るドラム缶風呂をワクワクしながら入ろうとしたしかし、

「…」

「にここ」

今から服を脱がなくてはならないのだが…そんな真の様子を未だにここにこしながら見ている空が居たのであった。

「にここ」

「…いや…ソラ」

「…どうしたの？」

「…ソラが見たまんまじゃ恥ずかしくて入れないのだが…」

「あっごめんね、ふふふ、じゃあごゆっくり」

そう言っソラは真が見えない位置に、笑いながら去って行ったのであった。

「…明らかにわざとだろアレ」

そう呟いた真であった。

「…」

いつの間にか夕日はくれ、今では見慣れてしまった五つの月を見ながら、真はドラム缶風呂に入っていたのであった。

「…いやー、やっぱり日本人は風呂だよ風呂、異世界に来てしまっても精神が弄られてしまっても、心がいやされる、それだけは変わらないな、特にドラム缶風呂なんて、雰囲気的にいつもは言っている風呂より倍の効果だぜ」

真は、これほどまでに風呂に入っただけで、こんな気持ちになれたのは初めてであった。

「…やっぱり…元の世界が恋しいな」

だけど…真は思った

「…だけど、自分としてはそう思ってるんだけど…心は、そうは思っていないんだよな…」

そう、真の心は今でも奪われたままのだ…自分としては元の世界が

恋しいと思いたいののに、それを否定する自らの心…狂ってしまいそうなおかしな状況下だが、皮肉なことにそれを防ぐのは、強化された精神によるものである。

「…そう言えば、中学の頃に、このドラム缶風呂に入った時は、鈴木と一緒に入ったんだけど、ドラム缶風呂の中で暴れまわったりして、ふざけ合ったりしたっけな…」

真はもしかしたらもう二度と会えないかもしれない友人のことを、このドラム缶風呂の思い出と一緒に思い出していた。

「…はあー、会いたいのに別に合わなくていいと思ってしまふ…分け分かんねー」

しかし、やっぱり自らの心は矛盾した方向に行ってしまうのであった。

「…チツ、はあー…なんか寂しいな」

真は、なんだかそんな風にばかり思っていると、何故かはわからないが、なんだか心ではなく、自分自身の存在みたいなものが、ぽっかりと穴があいたような、そんな気分にも襲われた。

しかし、そんな心を埋めるどころか、そのあいた穴を埋めた跡地にマジノ線顔負けの要塞を建てるような奴が表れたのだった。

「真」

野生のソラが表れた！！（ポケモン風に）

「…どうしたんだ一体」

突然何故かにつこり笑いながら現れたソラを見ながら、一応大事なところを両手で隠した後、何か緊急事態でもあったか？と思いがら言った。

「ふふふふ、実はね、私も一緒に入ろうと思って」

驚愕の言葉を言いながらソラは、自らのブレザーを脱ぎ始めたのであった。

「…………ッ！！！！ちょっとまった…行き成りどうしたんだ…え？
一体」

当然のことながら、突然そのような行動に出たソラに真は聞いた。

「だってさ、私一人だけで過ごしていても面白くないし…、それなら、真と一緒に入ってもいいかなって」

ふふふっと、ソラは鈴のような美しい声で笑いながら、ブラジャーが見えるか見えないかの位置にまでにソラの服を脱ぐ攻撃は続いていた。

「貴方だって、私の裸を見て、一緒に入りたいという気持ち…あるでしょ？」

「…ない…ないはずだ」

真は服を脱ぐ攻撃によってレッドラインまでに削られた自らのHPを元に、最後の抵抗を見せた。

「…フフフ」

「チラッ」

と、まあ、何が見えてしまったのかは想像にお任せ

「お願い、一緒に入ろう」

上目づかいでソラは真を見つめる攻撃をした。

「……………」

上目遣いでのお願い、ちらっと見えるあんなところやそんなところ、こんなことを超のつく美少女がやっているのである…如何に精神をいじられようとも、真は…

「…ワカリマシタ」

ついに倒れてしまい、そう言ってしまったのであった。そして…

「…フフフフ、アハハハハハハハッ」

しかし、突然、ソラは腹を抑えながら笑い転げたのであった。

「…へ？」

真は状況が分からず、そんな間抜けな声を出してしまった。

「ヒッヒヤハハハハハ、もう、笑い死んじやうよアハハハ」

きょとんと、真は目が点になりながらソラの様子をただただ眺めているしかなかったのであった。

「…どういう意味？」

ようやく出せた一言で、真はソラに言った。

「アハハハハハ、まさか、いくら男女二人っきりの旅をしてるからと言って、そんな別に恋人とかそういうのじゃないんだから、そんな筈ないじゃん、まさか、本気で信じちゃうだなんて、アハハハハハハハハハ」

「……………」

ヒュ————

と、期待を裏切られたドラム缶風呂に入った真の背中を、風か追い打ちをかけるように吹いた。

「フフフ、じゃあ、もうそろそろ上がんなさいよ、のぼせちゃうし、私も早くどらむかんブロに入って見たいから、じゃあね」
ソラはにっこり笑いながら、立ち去って行った。

「…それはないだろう」

真は、落胆しながらそう呟いた。

「…はあー」

「ざぼッ」

と、真はため息をつきながら、ざぼっとお湯に奥まで浸かった。

「…」

「りーんりーんりーん」

真はお湯につかりながら、元の世界と同じように鳴く虫の声に耳を澄ませ、そして、五つある月を見つめていた。

「でもまあ」

真は言った

「…俺は一人だけじゃない、自分と心が矛盾して、ぐちゃぐちゃになっても支えてくれる奴が、ちゃんといえると言うことが再確認できただけでも、良しとするか」

そう言って、真はドラム缶風呂から上がった。

「…」

真が見えない位置に隠れながら、ソラは黙って、真が来るのを待っていた。

「…真」

ソラは言った

「ありがとう」

真に聞こえないよう、静かにそう呟いた。

お互いに自らの心を支え合う、現代的なもので異世界を旅する旅は、まだ始まったばかりであった。

スクーターとドラム缶風呂（後書き）

指摘がありましたので、近代兵器操作術に関する説明をします。

まず、適応範囲として、軍用トラックはどうか、これは適応されません車は、最低でも武器（固定機銃等）をつけていないと兵器としてみなされません。

次、近代兵器と言っても、近代ではないが一応1868年までに開発された兵器である刀、槍等、適応されません。

次、なら、日本軍がよく使ってた、九十五式軍刀等の、近代軍が使っていた刀ならどうか、これは、可です。

次、銃剣等かどうか、これも可です。といっても、銃剣なんかで刀とやりあえるのかどうか分かりませんが。

一応、これらのことを主人公たちは、そんなことを思いつかなかった、と言うことにしておいてください。

ギルドと武器屋（前書き）

期末テストと言う魔物がようやく去った…

ギルドと武器屋

「ここがハーストリア帝国シューストラスの町か」

「ええ、そう、ここがシュートラス」

ソラが真の問いに答えるようそう言った。

オートバイクで、走ることに、ソラ曰く、あり得ないほど早く、彼らは遂に、シュートラスの町に辿り着いたのであった。

「…」

真はシュートラスの街並みを見た。

そこらじゅうにあるレンガ造りの建物、アスファルトではなく、石畳で舗装された道、露店の店、そして何よりも、人間のほかに、耳が人間よりも長いエルフ、体に鱗が生えている竜人、猫耳尻尾が生えている猫族、まあ簡単に言えば人外なやつらがあふれ返っているのである、如何にもファンタジーだったと、真はこれらの光景を見ながらそう思った。

「…よし、じゃあ、冒険者ギルドに登録する立っただけ？」

真は、事前にこのシュートラスの町に着いた後のことをソラと話しかけていたんであそう答えた。

「うん、そうね、…ええっと…あった！ギルドのシュートラス支店はあれね」

そう言ってソラの指さす方向を見た。

指さす方向には、これまた西洋建築で作られた大きい建物があった、そして横には、ギルドの証らしい、剣の紋章みたいなのが書かれた旗が掲げられていた。

「よし、じゃあ行こう真」

ソラはそう言うと、真を引き連れて、ギルドへと足を運んだ。

冒険者ギルドとは、簡単に言えばこの世界独特の就職先である。

この世界には、モンスターと言う有害な生き物がいる、それらから人間たち知的種族（エルフとか人間と一緒に暮らせる奴らをそう言うらしい）を守るために、設立された組織である、その構造は簡単で、まず、モンスターを討伐してほしいもしくは、旅の護衛をしてほしいという依頼が来る、勿論依頼を要請するときには、難易度に応じて、依頼主がお金を払ってくれるというもの、ギルドに入ればそれらの依頼が受けやすいことと、ギルドに加盟している場合、身分が保障される、言わば見ず知らずのものと言うレッテルがなくなるとか言う色々な利点がある。

これは異世界人の真にとって、非常に喜ばしいものである。これらが言わばギルドである。

ちなみにギルドの創設はこの世界の伝説をまず語らなくてはならない。

昔々、人々はモンスターによって恐怖の真ただ中にあった、魔王と呼ばれる恐怖の大魔王が表れたことにより、モンスターの数は急増、国では到底討伐しきれず、年間、何十万人もの人間たちが命を落としていた。そこで表れたのが勇者である、勇者は、類まれな知恵と勇気で、仲間と共にモンスター急増の原因となった魔王を倒すため、陸を空を海を水中を、地中を、掛けついに魔王を倒したのであった。

本当はこれよりもっと詳しくなるらしいけど、大体これが簡単にまとめた、この世界の伝説である勇者の伝説である、次がギルド創設に関して。

しかし、魔王を倒した後も、未だに大量にいるモンスターに人々は手を焼いていた、そこでモンスターたちを効率よく討伐するために、勇者の手によって作られたのがギルドである、と言われている

まあ、ギルド成立から1000年以上もたったんなら当たり前だよな：勇者と言う名前が出て来た時には驚いたけど、結局は半ば迷信みたいなものだと思いはそう思いながらギルドの受付の人たちに登録の申請を申し出た。

「あの、すみません、私たちギルドに登録したいんですけど」

「あっはい、登録ですね、はい、ではまずこちらの紙に、名前と出身地を書いてください、偽名でも構いません」

「はい、ほら真、ここに名前を書く」

ソラが、真に促すように言った。

「…分かったよ」

偽名OKと言う、不思議な制度に疑問を浮かべながらも、そばにあった、これまた初めて見る物ではないか？と言える本場の羽ペンで、何故か自然に描けてしまうこの世界のメゾン文字を使い、これまた初めて見る羊皮紙に、山崎真、と書いた。偽名を使っていると言っても、別に、本名で良いだろう、そして、出身地にはニホンと書いた、やっぱり本当の祖国を書いたほうがいいしな：と真は思いながら書いた。

「…よし、ソラ書けた？」

「ばっちり」

横を見るとすでに紙に、ソラ、と名前を書いていた。

俺が決めた名前だから、本名なのか分からないが、例え違っていても偽名がOKだから、別に関係ないか、真はそう思いながら、自らの名前を書いた紙を受け付けに提出した。

「ありがとうございます、次は、貴方達は二人でパーティーを組みますか？」

「パーティー？」

「単体での登録なら名前を登録すればいいけど、私たちは、一緒に登録したじゃない、だから、私たちがみたいな複数の場合、チームとして登録すれば、何かと便利じゃない」

ふーんと真はそんなものなんだと思い、すぐさまOKを出した。

「では次に、この水晶玉に、血を垂らしてください」

「…血？」

痛々しそうな言葉に、真はつついそう呟いた。

「真、ギルドに登録するには、正確な個人情報を持定する方法として、血をもらうのが一番の手段なのよ、この水晶玉はね、特別仕様で、血を垂らせばその人特有の血を認識してくれるの、そうすれば、もし、ギルドで登録した人が犯罪に走って、ギルドから抹消された後、その犯罪を犯した人が、生活苦で、またギルドに登録するため偽名を使つての登録を防ぐためにあるの、それに、この水晶玉を元に、私たちの強さを、図ってくれるって言うすぐれものだよ」

ソラが得意げに、そのことを説明してくれた。

「そうです、当ギルドでは、個人の管理のため、血をもらいます、その代りそれから得られた情報等は、このギルドが誓って守ると約束します」

「…」

真はやるしかないな…そう思い、受付の人が渡してくれたナイフで、指をちよつと傷つける、元の世界の真だったらそれすら躊躇してできそうになさそうだが、精神が弄られた影響でそう言うのは全くなかった。

「…で、血をこの水晶玉になすりつければいいのか？」

「はい、それではれて、登録が完了となります」

「…」

真は恐る恐る、自らの指からぷくつと出る血を水晶玉になすりつけ

た。

「かつ」

と、水晶玉一瞬光った。

「はい、登録完了ですね、そして、これがあなたの身分証明書です、これを持っていけば、ギルドの依頼や、ギルドの庇護も受けられ、ダンジョンの出入りも自由、各国の関税も通りやすくなります、ギルドランクについてですが、これは下からG、そして最上級のSSSまであり、ランクによって、受けられる依頼も違います、ランクを上げるには、依頼を達成した後、ギルドにきていただき、依頼内容に沿って、ポイント制で徐々にランクを上げていきます。そして、下の方に貴方の強さが…って弱…いくらなんでも弱す…あっなんでもありません、どうぞ」

「…」

もろに聞こえてもろに悲しんだ真であった。

銅板の下には、活字印刷のごとく、丁寧なメゾン文字が魔法で彫られて落られており、どうやら、強さが書かれていた、よやくするところだ。

ヤマザキ マコト

出身地 ニホン

種族 人間

職業 なし

魔力 なし
攻撃力 3
防御力 4
魔防御 4
祝福 なし
加護 なし

ギルドランク G

「…」

真はどうやら真のあまりにもの弱さに痛い目を見るような受付さんの視線をかわしながら、そこに書かれていた項目を見ていた。そして真は、どうやら強さを測ると言うのは、俺が開くウインドウズの劣化版みたいな物のようだとかこれを見ながらそう思った。

しかし、加護、職業、魔防御と言う自らのウインドウズには書かれていなかったはずの項目もあったことから、あながちただの劣化版とは言えないのではないかとも思っていた。ちなみにギルドランクについては、ファンタジーものをよく読む真にとって、どのようなものなのかは察しがついていた。

「ふふん、どう、真？ みしてみして！」

どうやら同じく登録を完了したとおもわしきソラが近づいてきた、どうやら真の強さに興味に興味があるようだ。

「…ソラ、いいかい、世の中には知らない方がいいということだってあるんだよ、だからね、今回は勘弁」

「もう、いつも真って、私がいつも、どれくらい強いのかって言うても効いてくれなかったし、何で教えてくれないの！！」
ソラがそう言って抗議する。

「いや、だってそう言われても言いたく…」

しかし真はその言葉を言い続けることはできなかった。

「奪ったり！」

隙をついてソラが真の身分証明祖を真から奪ったからである。

「ってあ！」

（いつの間に）真はソラのあまりにも素早い動きにそう思った。

「どれどれ」

「やめて！みないで！！」

真がそんな恥ずかしい声を出しながら慌ててソラから身分証明書を奪い返した」

「…真」

しかし…

「…大丈夫、私が居るから、ゴブリンよりよわくたって…私は真の味方だから」
遅かったようだ

「のわーーーーー！！！」

真の悲鳴が、ギルド中に響きわたったのであった。

「…で、真これからどうする、宿に泊まるためにも、資金を稼がなくちゃいけないけど」
ソラが言った。

「うん…それだね…正直、俺の世界の物を売れば、簡単に資金なんて、稼げるけどね」

「まあ、それもそうね、で真？どういふものを売るの？」

「うん…マジックペンにするつもり」

「…まじつくペン？」

「まあ、みてくれればいいさ」

真はソラをなだめた後、マジックペンを大量に召喚するべく、呪文？を唱えた。

「山崎真が告げる、スーパーに山づみにされていた、マジックペンを召喚せよ!!」

真がそう言った瞬間、目の前に忽然と、突然車輪がついた棚が表れ、その棚の上には、3色どれでも50円!というフリーズが書かれた、段ボール箱の中には、赤、青、黄色のマジックペンが大量に置いてあった、100本ぐらいあるだろうか。

「わー、真ってつくづく思うけどこれだけは凄いよね、で、これって何かな?」

ソラが：おそらく冗談なのだろうが、ちょっとばかり酷いことを言いながら、マジックペン（青）を取り出した。

「えーと、ソラ、確かこの世界って、書くものと言ったら、墨や、羽ペン、それと魔法墨位しかなかったんだよね」

「うん、一般の人が使っているのは殆どが墨ね、カラフルな色が出るのは高価な魔法墨だけね、使えるのはお金持ちか、貴族ってところね」

「：よし、じゃあ、ソラ、ちょっとそのペンかしてくれないかあ」

「え：ううん」

ソラはちよつと戸惑ったようにマジックペン（青）を真に渡した。

「よし、じゃあソラ、まずマジックペンの使い方として、この蓋を外す」

真はそう言った後、ほんと、マジックペンのふたを外した。

「おー、面白いね」

「次に、この：そうだな、この特殊なインクのついた所をこうしてこういう所にこすりつければ」

そう言って真はマジックペンが大量に入った段ボール箱にメゾン文字で、どうだ?凄いだろとマジックペンで書いた。

「：うそ：そんな簡単に、かしてかして!!」

ソラがうろたえながら、真のマジックペンを奪い取った。

「きゅきゅきゅきゅ」

そう言って、ソラは夢中でマジックペンを書いた。

「…」

「…」

そして、一時の沈黙？が訪れた

「真」

「はい？」

「…これは凄いわ、下手したらペン革命が起こるかも」

「…それは凄い」

真はマジックペンだけでそんな反応をするソラの顔を見ながら、苦笑いを浮かべていた。

「まあ、とりあえずソラ、結局これどこに売ればいいと思う？」

真はとりあえず、マジックペンの説明をした後、ソラに向かって言った。

「うん…いま思いつく最善の手段としては、やっぱり文房具とかを専門に売っている店に行くしかないよね…」

ソラがそれしか思いつかないという感じに、言った。

「…文房具屋ね…」

異世界でもそう言うのが有るんだと、真は思いながら、とりあえずソラの案に乗ることにしたのであった。

そして十分後

「おお！！これはどこの国の物ですかね？」

案の定店員を驚かしていた。

「はい、このマジックペンは、わが誇りある祖国、日本国独自の技

術で作られた、今までの羽ペン等に変るペンであります、わが国でも珍しいもので、どうぞ、一つ1銀貨でどうですか？」

真はソラと打ちあった際、一応日本国と言う国で作られたということとを強調しておくことで、体面を建てるべく、そのようなセリフを言った真であった。

ちなみに、この世界はキチンとした10進法でまず、

一円玉の役目は、石貨で

5円玉の役目は、白石貨

10円玉の役目は、重石貨

50円玉の役目は、白重石貨

100円玉の役目は、鉄貨

500円玉の役目は、白鉄貨

1000円札の役目は、銀貨

5000円札の役目は、白銀貨

10000円札の役目は、竜石貨

そして、100万円が金貨らしい

そしてさらに上の白金貨が、なんと一億円：

正直この制度を聞いた時は、とてもじゃないが、白金貨なんて持ち歩けねーよ、ていうか一般の店でつかえるのか？と思う真であった。そして、ファンタジーのくせして通貨だけは徹底してるなど思う真でもあったが、ソラにそのことを聞くと、確かに、名目的にはこんな感じだけど、結局はこの世界の通貨価値は現代日本よりも不安定で、例えば、白銀貨の価値化下がったりしたら、なぜか銀貨の方が高くなってしまいうという現象が起きてしまうらしいことから、そこまで徹底されていないらしい。

ちなみにこの世界の平均的な職業である農民の平均年収は白銀貨5枚らしい、そして、この段ボールの中には百本ぐらいのマジックペンがある、つまり、一気に農民の2年分の収入を見込めると言う、

凄まじい結果になるのであるが：

「いいでしょう、このまじつくぺんとやらはすばらしい、むしろ1銀貨ですむとは：ぜひ買い取らせていただきたい！！」
見事に交渉成立であった。

「…」

「：凄いよ真！！みて、白銀貨が10枚！！もう、遊び呆けて暮らせるよこれ！！」

「：確かにそうかもな」

真も、予想以上の稼ぎに半ば呆然としながら白銀貨を見つめていた。農民の皆さんすみません、真はそう思っていた。

「で？どうする？このままこのお金で家を買って、ここで私と一緒に定住生活送る？」

ふふふっと、ソラは真に向かっていたずらな笑顔を向ける。

「いや、それはダメだろ、お前の記憶を取り戻すためにも、ここに定住て言うわけにもいかんだろう」

「ふふふっ冗談よ冗談、それじゃあ、一つ今日泊まるホテルを決めようか？今までわざわざこの街はまで急いできたのも、真が寝袋で寝るのですら耐えられないうえ、寒いとか言ってたからだしね」

「：悪かったな」

真はソラの言葉に反抗するためそう言った。

「…」

商人はマジックペンを見つめた。

「…ニホンとか言っていたな」

商人はマジックペンをしげしげと見つめた後、真達が去って行った通りを見つめた。

「…どんな国かは知らないが、これは儲かりそうな予感がするな」
商人はそうつぶやいたあと、文房具屋に入って行った。

「…ここにするか」

真は、とりあえず、ソラに希望により、真の目の前には、このシュートラスという町で、一番豪華らしいホテルがあった。

外見としては、レンガ造りの3階建、如何にも中世ヨーロッパ的な建築美、ケルン大聖堂の小型版ともいうべきかまあとりあえず、そこまで大きくはないが、豪華な屋敷であった。

「…ぎい」

真はとりあえず、恐る恐る開いてみた、こんな豪華ホテルなど泊まったことなどないからである、すると

「「いらっしやいませ!!」」

行きなり、猫耳&メイド服の美女がそう言って来たもんだから真はちよっとばかりうろたえた。

「あ…あ?」

(すげーモノ本のネコ耳メイドさんだ)

真が驚いていると、それに見かねたソラが、代わりに受付のネコ耳メイドさんに話しかけた。

「あのすみません、とりあえず一泊したいんですが、おいくらでし

ようか」

そんな真をおいてきばりに、ソラが言った

「はい、一泊1銀でございます、朝、昼、夜等の食事をする場合は、これに5白銅貨を上乗せします」

(…うひゃー、高け…)

金銭感覚が狂いそうだな、真はそう思った。

「わかりました、じゃあ、これで」

そう言って、ソラはいつの間にも真の懐から取ったのか、3つの銀貨を真の財布から取り出すと、支払を行った。

「ありがとうございます、では、部屋をご案内します、ついてきてください」

そう言って猫耳メイドさんは真たちを誘導していった、

「…」

真はジーと案内をする猫耳メイドさんの耳や、尻尾を見つめていた。(すげー本物だ、秋葉のコスプレどころの話じゃないし、やべーもふもふしてみたいわ)

ソラは猫耳メイドさんを見ながらそんなことを思い浮かべていた。

「真、なにメイドさんをじろじろ見てんのよ」

しかし、ソラによって、開けなくその妄想も終焉を迎えたのであった、

「わー凄い!!」

「おー、ホテルは別に現代日本とそんなに変わんないだな、普通にベットだし」

まあ高いからだと思うけどね

真は布団をトランポリンにして遊ぶソラを見ながらそう思った。

「うん、やっぱりベットは良いわ、うん」

「…」

真はホテルの室内を見渡した、二つのベットに、下に引いてある高

そんな絨毯、御化粧台とおもわしきモノやら、本まで置いてある。

「あ！真」

ソラが何やら思いついたように真の名を呼んだ。

「どうしたソラ」

何やらにやにやしているソラを見ながら真は言った

「もしかして、ベットが一つだったらよかったのになーなんて思ったり？」

「…」

真は美少女と二人でホテルに泊まるというのに、そのことを考えてもみなかった自分に悲しみを抱いたのであった

真たちはとりあえずホテルを確保した後、防具やら剣を見につめた、近代兵器を使う真にとって、剣は必要かと思ったが、せっかくファンタジーな世界にきたのだから、武器屋に行かなくては損だろうとおもい、行くことにしたのであった。

「…おお、マジで剣とかが売られてある」

まず真たちは最初に言ったのは、ホテルから近かった武器屋であった。

剣を二つ合わせた看板に、武器屋とメゾン文字で書かれてある、まさしくファンタジーだ、そう思った真であった

「真、そう言えば剣とか使えるの？」

鋼色の剣に、目を見開いて食い見るように観察する真を見たソラは、疑問に思ったのかそう言った。

「…うん…なんて言うか…その」

真はすぐさま、全く使えません！てへ！なんて恥ずかしく言えずに、何とか話をずらそうとした。しかし…

「おい、話をずらそうとしてんじゃないぞ小僧、その体を見る限り、使えないにきまっておろうが！！」

突如不意を打つように来襲した男のどなり声によって、真の野望は粉々に破壊されたのであった。

「へ？ちよっえ？だれ？」

そう言っただけで真は声のした方向を向いた、そこには、如何にもファンタジーな世界で武器屋を経営しているぞ！！と宣言しているような、身長190センチの長身の、あり得ないほど迫力満点のマツチヨなオヤジが居たのであった。おそらくこの作品がワ○ピースであったならば、後ろに、ドーンという文字がでっかく書かれていたであろう、そして何やら服の所に店主とわざわざご丁寧に描かれてあった。

「：如何にもファンタジーみたいな店主だな」

普通ならその気迫に押されそうだが、案の定真は精神をいじられていたので、恐怖心を感じられず、ぼそっと、素直に思った事を口に出したのであった。

ちなみに、ソラは震えていた。

「ほう、そんな軟弱な肉体をして、震えあがらずにおれるとは、心は確かなようだな」

ファンタジーな店主そう言うと同時に胸を強く叩いた、正直言っただけ怒鳴っているのではないのか？と思ってしまうような大声であった。

「：はあ、まあとりあえず、俺にでも使えそうな、武器とかないかな？できれば彼女にも」

その声にもひるむ事さえなく、自分はお客様だし、頼めば案内してくれるだろうと思いきやそう言った。

「：ふふふ」

しかしその返答は何やら無気味な笑い声であった。

「：はあ？」

真はとぼけた声でぼーっとしていた

「ふふはははははははははは、根性あるな小僧、大抵の者は俺の声

を聞いただけで怯むのに、おぬしは全然そのそぶりを見せない、なんだ？もしかしてお前は何か特別な理由でもあるのか？」

ファンタジーな店主は笑いながら、自らが疑問に思ったことを真に問いかけた。

「…いや、別に」

まさか異世界人ですよとは言えない真は、必然的にそう言うしかなかった。

「…ふん、まあいい、しかし初見で俺に対して堂々と喋りやがったのは、そうそういないぞ…しかも、お前さんは全然戦闘経験とかなさそうにだ…」

また話がループしそうだ、そう思った真はとりあえず、初期の目的である自分にも使えるような武器の所え案内させてもらうため、話を元に戻すことにした。

「とりあえず、店主さん？でいいですか、できればこんな風に雑談するより、今すぐ自分や彼女にも使えるような武器が有る場所に案内してほしんですが」

真はこれ以上探求されてはたまったものではないので、強気でそう言った。

「おおっそうだったな、ふふふ、堂々と喋るだけではなく、意見までもしたか、面白い奴だ、付いてこい」

（お客さんを相手にする態度じゃないよな…）

今更ながら、ファンタジーな店主の現代日本では考えられない態度に、そう思った真であった。

「で？具体的にどんな武器が良いんだ？言っとくけどお前には剣は無理だぞ、見るだけで分かる」

「…まあ、一応護身用の短剣とかないですか？なんか、魔法の付属効果がついた短剣とか？」

ここはファンタジーね世界だし、真はそんな短剣が有るかもしれないと思い、真はそう言った。

「…確かにあるが、あれは高いぞ、短剣でも一個二銀貨はするぞ」

（…結構高いな）

しかし、普通の短剣の相場など知らない真は、とりあえず、隣にいるソラに聞いてみた

「なあソラ、買っても良いか？」

「…いや、別に良いじゃない？ お金もたくさんあるし、贅沢しちやいなさいよ」

なにやら、そこらへんに置かれてあった高そうな剣やらクナイ？ の様な武器に夢中ばいソラはそう言った。

「…それじゃあ、そう言うことで、とりあえずどういうのか見せてくれませんか」

「…分かった、ちょっと待ってくれ」

そう言ってファンタジーな店主は何やら店の奥へ行った

数十分が経過した

「すまんすまん、遅れてしまった、これなんかどうだ？」

そう言って、ファンタジーな店主は何やら、埃をかぶっている短剣を差し出した

「これは、俺が作った中で力作だった魔短剣だ」

「…これは…どう言う感じの短剣ですか？」

真は言った

「おう、この短剣の付属効果は、俊敏さアップだ」

「俊敏さ？」

真はファンタジーな店主の言葉をこだまのよう繰り返した。

「そう、俊敏さだ、お前はまったく言っていないほど、俊敏さがな

さそう：いやないな、そんなんじゃないや正直言つてやばいからな、奇襲でもされればころっと死んじまうぜ、だから、お前が一番よさそうな魔短剣はこれが一番なんだよ！」

そういつてファンタジーな店主は短剣を真に手渡した。

「：」

短剣と言つても、真は触ったことなどないので、いろいろ観察して見たが別にこれと言ったことはなかった。

「確か、このような魔道具つて、なんか使い捨てが多いとか聞いたんですが、そこら辺は大丈夫ですか？」

真はソラが言っていた、魔道具は高くて使い捨てが多いという言葉の思い出し、確かめるべくそう言った。

「ああ、おいおい、もしかして、お前さん魔道具と、この魔短剣を同じようにみているのか？」

「：いや：その」

真は言葉に詰まった

「：ふん、まあいい、その顔を見る限り、よく知らないんだろう、よしじゃあ俺が一から教えてやる」

ファンタジーな店主はそう言った

「いいか、魔道具ツつのは言わば魔力やら、魔術師の想像力を補う、言わば魔術師の力を強める効果を持つ道具のことを言う、これら魔道具は一部を除いて使い捨てが多い、だぶんそこからお前の耳に入ったんだろう、そして、このような魔短剣についてだ、これはな、力具と呼ばれているんだよ」

「力具？」

真は初めて聞いた言葉にはてなの文字を浮かべながら呟いた。

「力具と言うのは、いわば、持っているだけで力がつける物のことを言う、この短剣は、威力とかそういうのは普通だが、その付属効果は魔道具と違い、半永久的に使えんだ、まあそんなものって言う事だ、他に、付属効果だけじゃなくて、武器自体が魔力を帯び、魔力がない子供が降ったとしても、風の刃を自動的に起こすような物

もあるが、これは魔武器と呼ばれている、まあいわば究極の武器って感じた、もっとも、魔武器だなんて滅多に市場に出ないがな、ちなみにうちは扱ってない、これでいいか？」

「…」

つまりなんだ、魔術師の力を上げるのが魔道具で、これは一部を除いてインスタント式、力具や魔武器は半永久的に使える、そんなんじゃないかな、真はそう思った。

「ほう、その顔だと、どうやら分かったみたいだな、普通こんな簡単なことを分らない奴などいないはずだが、どうせ意味ありなんだろう、深くはつつこまん、お前は俺のお気に入りだしな」
なんだか頼もしく見えてくるファンタジーな店主であった。

「ありがとうございます、そう言えば俊敏アップて言うのを出すにはどうしたらいいんですか？」

「ああ、それなら、短剣に対して血を垂らせばいい、力具の中には別に普通に身につけるだけで効果があ得られる奴もあるが、魔法の加護がついてある剣などの加護を受けるには、自らの血を垂らすことによって、初めて効果が得られる、別名、武器との契約とも言われ、血を垂らせば、魔法の加護は所有者にしか受けられない、仲間を巻き込んだの加護の場合は、仲間に加護を与えられるがな、まあ、その短剣の様な奴の場合は、契約することによって、ようやく得られるタイプだ、どうだ？大サービスとして、銀貨三枚だ」

「…」

まあ、確かに、自分は俊敏さに欠けていることはある、これからの旅にもされは付きまとうだろうし、だからと言って今すぐ鍛えるわけにもいかない、ならば、これは買った方がいいだろう、真はそう思った

「分かった、買おう」

「おう、ありがとさんよ」

ファンタジーな店長は、なんだか嬉しそうに言った。

「次は防具なんだけど、店主さん、なにか先ほどの短剣みたいなお勧めはないですか？」

真は買った短剣をとりあえず懐にしまった後、今度は身を守るための防具を買ったそう言った。

「うん：防具か：今革製の防具の生産地がドラゴンに襲われちゃってな、最近こなくなっちゃったから、手ごろな防具がねーんだよな、だから残念ながら防具は今ほとんどないんだよ、有るとすれば、鉄でできた重い盾ぐらいか、それ以外は、どうしても力具になっちゃうからな：お前さん、力なさそうだから、鉄のような重い盾なんて、持てないだろ？しかも、力具の防具っ言うのは需要が高い、そのため、どうしても高くなっちゃう上、いまこの店には少数しかない、すまないがな」

「そうですか：じゃあ、鉄の盾を持てるようになれるような、力具はありませんか？」

幸いにも金があるので、真はこの短剣の俊敏さアップのように、もしかしたら力アップがあるかもしれないと思い、そう言った。

「うむ：そんなものないな、今のところ力具はこの店では五つしか扱ってない、その五つの中に、力を強めるものは残念ながらないな」
「どうやらそんな都合よくないみたいであった。」

「：わかりました、ではいろいろとありがとうございました」

ほんの一瞬、その五つある力具を全部買ってみようかなと思った真であったが、いくらなんでも、そんなことをしたら、何だか自分が金持ちで傲慢な人間みたいだし、店長さんの機嫌が悪くなるかもしれないかと思い、これぐらいが引き際だと真は思った。

（じゃあ、なにか防具の代わりになるようなものでも召喚するか：）

「わかりました、いろいろありがとうございます」

「おうよ！！今度防具用の力具仕入れたら、また来てくれよ！」

言葉だけ見れば別に普通に別れを言ってるだけのように見えるが、その実態は怒鳴るような声で怒っているように言っていたのであった。

（あの人は声の手加減と言うのを知らないのだろうか…）

真はそう思いながら、ソラの所へ行った。

「…で、ソラは何か買うの？」

真はとりあえず、色々剣なんかが置かれてある場所にいたソラを見つけた後、何か買うものでもあるのかな？ そう思い話しかけた。

「え？ ああ、それならもう済んだところ」

そう言って、ソラは戦利品？ のように買ったと思わしきレイピアを見せつけた。

「…あれ？ 財布俺が持ってたよね」

「ふふふ、真から金をくすねるなんて、ちょちょいのちょいよ」

鈴のような声でくすくす笑うソラを見ながら、今度から財布を厳重管理にしておこうと思う真であった。

ダンジョンへの序章と、裏で進む陰謀

ダンジョン：

見た目は単なる洞窟であるが、通常洞窟とは月とすっぽんくらい違う、その洞窟は別名、モンスターの巣とも言われている、一説によれば、モンスターはダンジョンより生まれるとされ、外にいるモンスターは、まだ見つからないダンジョンから表れると言われている。

しかし、人々はダンジョンをこう呼ぶ、夢と希望の洞窟と：

なぜモンスターの巣であるダンジョンが夢と希望の洞窟で有るのだろうか：それは、ダンジョン内のモンスターは、人間などに倒されるとき、それと同時に出す、ドロップアイテムと言われるものが関係している。ドロップアイテムは、この世界に必要な物資などで構成されている、そのアイテムは、塩などの日用品から、剣などの武器類、魔道具などの、魔術関連に至るまでである、そのため、得られるドロップアイテムなどにもランク付けがあり、例えば、コシヨウの様な滅多にない香辛料はAランク、現代の様に、木で出来た物ではないが、簡単に出てくる羊皮紙、これはGランクである。このようにSSSからGまでであるとされている。そして、これらを入手するには、なにもモンスターを倒さなくてはならないということだけではない、他にもダンジョン内に何故か、忽然と現れる、宝箱によって入手できることだってある。

そして、話は元に戻るが、なぜ夢と希望の洞窟なのか、それはこれらをダンジョン内で入手し、売ることによって、生計を立てることができるからである、場合によっては高ランクのアイテムを入手することができれば、一攫千金になりうるからである。

文明レベルは中世ヨーロッパ（違うところもあるが）であるこの

世界において、農民などは食べるだけで精いっぱいである、行動しなければ農民たちは一生ろくな生活ができないのである。

彼らにとって、ダンジョンに入って、一攫千金を狙う事は、まさしく夢の様な事なのである。そのために、農民の中でも腕の立つ者は、冒険者としてダンジョンを冒険する、また、この世界の人々のダンジョンに対する価値観が現代日本人とは異なると言うことも、原因の一つでもある。

さらに、ダンジョンの利点はそれだけではない、外と比べ、モンスターの出現率がありえないほど高いので、ただ純粹に、力を求めたりするものも集まり、そして冒険心に駆られた物たちも集まる。

以上が、モンスターの巣であるダンジョンが別名『夢と希望の洞窟』と呼ばれるゆえんである、じつさいに、大きなダンジョンでは人が集まり、町が形成され、通称、ダンジョン町と呼ばれるものを形成することもある、シュートラスも収入の半分以上が、ダンジョンによるものである。

買い物を終えた後、ホテルに帰った真は、明日行く予定である、ダンジョンの事を思い浮かべながら、ダンジョンとは何なのかを頭の中で整理をしていた。

「で？明日ダンジョンに行くんでしょ？」

ソラがお化粧台にあった、ブラシで髪を溶かしながら言った。

「うん…まあこれからのことのためにも、まず力をつけないといけ

ないし、ダンジョンの一階目は戦闘の初心者にとって、とても都合のいい場所らしいし、そろそろ、近代兵器操作術を体験してみないといけないしな、それにさ…」

真は何故か弄られたはずの自らの心の中に、浮かんできた事を言った。

「なんだか、ダンジョンって冒険心に駆られるしな」

「…」

「…」

一瞬間が空いた。

「…ふふふっハハハハ！！攻撃力が4の癖に」

ソラがそんなひどい事を言った。

「…それを言うなよ、それに俺は攻撃力だなんて関係ない、近代兵器の強さぐらい教えてやっただろう」

真は、今まで召喚した物の中で唯一武器である拳銃を見せつけた。

「はいはい、だけど真、たまが勿体ないとか言って結局いつまでたっても、そのけんじゅう、私の目の前で使わなかったじゃない」

「…うんまあ、それもそうだけど」

ソラの的確な質問に真はちよつとばかり言葉を詰まらせた。

「なんていうかその…この武器は扱いにくいというか、まだ俺はこの武器を完璧には使えこなせないんだよ、だから、明日、他の俺の完璧に操作できる武器を召喚して強さを見せつけてやるから、期待してろよ！！」

真はとりあえずそう言った。

「はいはい、そのキンダイヘイキってというのがどれくらい強いのか、明日確かめていただきます、楽しみにしてるわよ」

ソラは笑顔で真にそう言った。

「…了解、そう言えばさソラ」

「ん？」

「このギルドカードに書かれてある、職業とか、どういう意味なの

かわかる？」

真はこのギルドカードを手にした時、疑問に思ったことを言った。

「うん：なるほど、真は異世界人だし、無理もないか：じゃあ説明するね」

ソラはそう言うのと、自らのギルドカードを提示した。ギルドカードにはこう書かれてあった。

ソラ	
出身地	不明
種族	人間
職業	魔術師
魔力	100
攻撃力	18
防御力	23
魔防御	40
祝福	なし
加護	なし

ギルドランク G

「…」

真は自らのウィンドウズにもつていなかった魔力が出ていたのに、ちよつとばかり驚きながらも、とりあえず、自らの数値の劣等感に、愕然としたのであった。

「ほら、落ち込んでないで：とりあえず、このギルドカードの説明はね」

落ち込んで着る真を宥めながら、ソラはそう言うのと、まず職業の欄を指差した。

「まず、職業なんだけど、有名なのは、剣士、魔術師、槍使い、弓

使いとかが有るの、これらの職業を持てば、それぞれ、剣の使い手、魔術の使い手であるという事が、分かるの、特に使い手のない人には、なして付くわね、因みに、複数持っている人もいるけど、それはもう才能の問題だからしたかないのよね、まあ、魔術師になるにも才能の問題だけど…」

ソラはいったん一息ついた後、また口を開いた。

「まあ、とりあえず、職業は自らの得意な物を表しているのよ、そして、自分がやっている、職業のことも指すの、例えば、町を守る騎士なんかは、自らの得意分野である剣士、そして自らの職業そのものである騎士、と言う感じにギルドカードに出てくるのよ、まあ、職業についてはこんな感じ、分かった？」

ソラは真がちゃんと理解できたのかを、確かめるべくそう言った。

「うん：まあ、つまり、職業と言うのは、自分の得意分野であるものと、次に自分が付いている、職業である、こんな感じ？」

「そう、職業については簡単に言うとなんか感じ、そして、他の、攻撃、防御なんだけど、これは名前の通り、攻撃はその人の力を表しているの、そして、防御はその人の耐久力かな？これが高いほど、攻撃を受けても耐えられることができるの、因みに、攻撃と防御はね、人間の中にある、気、と言うのが関係しているの」

ソラはいったん話を区切った。

「気と言うのを簡単に説明すると、通常この世界の生き物の中には、気と言う特別な力があって、この気を操作することによって、例えば私の様な女性でも、男以上の力と防御を持つことだって可能なのよ、つまり、私のこの数値は、気を操作している時の力を表しているの、攻撃や防御を上げるには、如何にこの気を自分の体にあつたように動かすのが肝心なこととなるの：と言っても、そんな毎日気を使っているわけでもないし、それにこの世界の戦闘を主に行っている人たちにとっても、疲れるのよ、気を使うのって、だからいざとな

ったら時しか使わないし、どんなに気を操るのが得意な人でも、気のみでは、攻撃防御共に40くらいで、なかなか上がらないのよ、あまりにも上がらないうえ、気を使って戦闘したあとにはあり得ないほど疲れるから、みんな気を鍛えるのを早々にやめて、力具を使って身体能力を上げているっていうのが現状だけだね」

「…」

「それに、魔術師の場合、攻撃と防御は、扱う魔法によって変わるの、例えば、攻撃的な魔法が得意であれば、それに準じて攻撃力が上がるし、防御的な魔法を得意とすれば、防御力が上がるの、例えば気が弱くてもね」

ソラが追加するようにそう言った。

「…」

つまり、この世界の人間には魔力のほかに、おもに身体能力のみを上げる不思議な力、気、と言うものが存在するのか…と言っても、それを操るのは至難の技らしいけど…そして、気には限界がある、と言う事か…

真はソラの説明を聞き、そう思った。

「気についての説明、分かった？」

「うん、まあ、なんとなくだけど、それで、その気と言うのは俺にでも使えるのか？」

真は今は魔力がないので魔法は使えないが、もしかしたら気を使って挽回可能かも！と思い、ソラにそう言った。

「…うん…異世界人に気が使えるかどうかは分かんないけど、多分使えるんじゃないかな」

「お！じゃあ、ソラ気の使い方を教え…」

「あ！気の使い方を教えるのは無理だから、気と言うのはね、個性があるの、だから他人から気の扱い方を教わっても、まったく上達しないの、こればかりは自分で取得するしかないね…」

「…がくん」

と真はうなだれた。

「ふふふ、まあ、とりあえずは次に魔防御、これは、魔術攻撃に対する防御の事、例えば、普通に切りつけるなら、魔防御がいかに高くても問題はないの、だけど、風の魔法を使った、例えばエアーカーターで切りつけるとなると、魔防御が働いて、攻撃が相手に効かないって事が有るの、いわば魔法攻撃に対して、特別な防御力を持っていることを指すの、ちなみに魔防御は気には関係なく、体内にある魔力によって上がったたり、下がったりするの、分かった？」

（つまり、魔防御は、気と関係なく、魔力に関係するのか、俺の防御と魔防御が同じなのはそのためか…）

「…まあ、俺の世界にもこう言う概念があったからな…大丈夫だ」
「そう、じゃあ次に加護や祝福はね、いわゆる神様から特別にもらったり、ドラゴンみたいな、特別なモンスターや種族からもらえるの」

「え？神様？」

真はソラの口から出て来たその単語に、ビックリしながら答えた。

「うん？知らないの真？」

ソラもどうやら驚いた様子

「…いや、俺の世界にも神様はいるが、実在はしないのだが…もしかしてこの世界では実在するの？」

「…どう言う事？」

ソラがあまり理解できないような感じに、頭をかしげながら言った。
「だから、俺の世界の神様は架空上だけど、この世界には神様は実在するのかってこと」

「…」

「…」

「…つまり、真の世界には神様はいないってこと？」

「人によつてはいると考えている人もいるけど、少なくとも俺は存在しないと思う」

時々、神様、どうかテストの点数が良くなりますようにと願うけどな、真はそう思いながら言った。

「…なるほどね…さすが異世界、魔法がないどころか、神様が居ないだなんて…いいわ、この世界において、神様がどういう存在なのか教えてあげる」

どうやら、この世界には神様は実在するようだ、真はそう思いながらソラの言葉を聞いた。

「まず、神様って言うのは、この世界には数多いるの、例えるのなら雷の神、トールの様な自然現象をつかさどる神、それと、特定の地域だけで信仰されている土地神とか、場合によっては、特定の人々や種族の信仰対象にされている、神ではないけど、龍とかだね、これらが神と言うのも、あと、悪魔とか、天使とかも、神様ではないけど、近い存在、これが、私たちの世界に実在する神様と、神様に準じたなにかなの、他にもあるらしいけど、さすがの私もこの世界のすべてがわかるわけじゃあないから」

「…」

とりあえず、この世界には神様とやらが実在することを確認した真であった。

「真、もうそろそろ寝るよ」

ギルドカードの説明がある程度終わったあと、どうやら、眠くなったらしいソラがそう言った。

「…なあソラ」

「ん？」

「せっかくこうしてホテルに泊まったんだからさ、もうちょつと起きてようぜ」

真は、携帯の時計の、8・00の部分を目指した。

ちなみにこの世界にも時計がある、と言っても、真の持っている携帯のようにデジタル方式ではなく、アナログ方式の時計で、振り子時計が一般的らしい。

ちなみに、ソラはすでにアラビア数字を読むことができるのである、もう驚かねーよ、そう思う真であった。

「…ん？ちつとも遅くないけど…」

現代人にとっては、まだまだこれからだと言う時間帯だが、この世界ではそうではない、事実、このホテルに使われている照明器具は、なにやら、紫色の未知の蝋でできた、真の世界の？燭より、なぜか結構明るい蝋燭が主流である。しかし、それでも現代の電灯ほどではないので、昔の人のように、この世界の人たちはこれくらいの時間で寝るのである。

「…いいか、ソラ、俺たちの世界では17歳は普通早くても、11時ごろに寝るのが常だ、今までは碌な部屋もなかったから早めに寝ていたが、今はこの様に現代とほぼ変わらない部屋にいる、と言うことは…」

真は、ろうそくの光に不気味照らされながら言った。

「…ん？…と言うことは？」

ソラは頭に？を浮かべながら呟いた。

「…」

「ん？」

ソラは真が向いている方向を向いた。

そこには…ベットがあった。

「……………ッ!!!!!!!!!!!!!!」

ソラが突然驚いた様子になった。

「まままま…まさか、え？え？そんな、エロ…」

「カードゲームでもしようぜ！！」

ナニかしら勘違いしていたソラであった。そして、如何にも真らしい意見でもあった。

「よっしゃー！！あつがりー！」

ソラが、ダイヤの2とクローバの2を同時に捨て、そう宣言した。

「…なぜだ…なぜそんなにも強い」

ちなみに今やっているのはババ抜きである、やり方については、どうやらトランプの様な遊びぐらいなら、この世界にもあるらしく、天才なソラは、すぐさまやり方を覚え、いつの間にか教えていたご本人が連戦連敗であった。

「ふふふ、お主もまだまだじゃのう、なんちゃて」

ソラは鈴の様な声で、笑いながらそう言った。

「…もう寝ようぜ、疲れた」

「だめ、今度は七並べよ、もう、このトランプゲームって、楽しいわ」

「もう、マジ勘弁」

結局ソラがついに眠くなって終了した、11時まで連戦連敗し続けた真、哀れなり。

所変わって、これは真たちがランプゲームで盛り上がっているころ、とある場所にある館の中、その館の中央の部屋に、二人の中年くらいの男性商人と思わしき人物が集まっていた。そして、その中年くらいの男性商人の片方は、あの文房具屋の店長であった。

「これは…素晴らしい、一体この様なものをどこで手に入れたのですか」

もう片方の中年くらいの男は、歓喜の声をあげながら、同時に自らの頭の中に浮かんだ疑問を、文房具屋の店長に質問した。

その中年くらいの男の前にいる、文房具屋の店長が持っていた物は、マジックペンであった。

「いえいえ、ビョーシェ商人ギルドの頭、ヤークト・ロウンさんが驚くのも無理なからぬ事、これは、従来の筆記用具とは似ても似つかないほど、高性能なペンです、私は、まじっくペンなる物を複製することはできないかという事に気づきました、このまじっくペンを、素材的に難しいという事に気づきました、このまじっくペンを主にコーティングしている、木でもない、岩石でもない、つまり、このマジックペンは新物質で構成されているのです」

文房具屋の店長は、ビョーシェ商人ギルドの頭、ロウンの問いを受

け流し、自らが持っている、マジックペンのすごさを語った。

恐らく、文房具や店長が言っている、新物質とは、マジックペンに使われている、プラスチックのことであろう。

「確かに、そのような物質見たことがない、何十年も世界中を旅してきた私ですらもな：とりあえず、ヤルトーよ、商品を紹介して、私のこのまじっくぺんとやらに対する注目を上げるという意図も分かるが、それより先に、私はね、一体どのようにしてそのような商品を100本以上も手に入れたのかを、聞いているのだ」

落ち着いた様子で、ロウンは文房具屋店長：ヤルトーに対してそのことを聞いた。

「ロウンさん、今から言う事はとても信じられないとは思いますが、どうか、聞いてください、ビョーシェ商人ギルドのにとつて、利益を上げる為の重要なチャンスなのです、信じられると誓いますか？」

「：いいだろう、信じよう」
ロウン言った。

「：実はですね、これをうちに持ってきたのは、別に、何処かの商人でもなく、かと言って、国が新開発したものでもない、何の変哲もない、17歳くらいの男女が持って来たのだよ」

「な！！」

ビョーシェ商人ギルドの頭のロウンは驚愕の声を発した。

それはそうであろう、現代で例えれば、レーザー銃を、17歳の男女が持って来た感じである、驚くのも無理はない。

「彼らはニホンとか言う国から来たとか言っていたが、聞いたこともない国です、おそらく何処か遠い果ての小国か何かでしょう、それから察するに、彼らはろくな護衛を持っていないのではないのか？と私は思いました、事実、密偵からの情報では、彼らは護衛の一人や二人も雇ってはいないのですよ」

「：つまりヤルトーよ、君は何を言いたいのだね、はっきり言いたまえ」

恐らくヤルトーの意図が分からないのであろう、ロウンがそう言った。

「分からないのですか？このような素晴らしい商品を、百本以上も持っている連中ですよ、詰まり、他にもまだまだ沢山、このまじっくペンを彼らは持っているだろう、いや：きつとそれ以上ものも：持っているに違いない！！」

ヤルトーは右腕を握りしめて言った。

「まじっくペンの様な物を大量に持っているうえ、まともな護衛が存在しない、これは、正直いって、チャンスではないか？奴らからまじっくペンの様な素晴らしい物を奪えば、我々ビョーシェ商人ギルドの資金は潤い、莫大な利益を得ることが可能である、そう思わないでしょうか」

ほう、と、ロウンの口からため息が漏れる。

「つまり、ヤルトー、その少年少女から、マジックペンを奪おうと？」

「そうです」

「：しかし可笑しいな、もし、相手が少年少女だけならば、別に我々ビョーシェ商人ギルドに発表しなくともいいはずだ、あなたの部下たちで容易に片付くはず、利益もヤルトー、自分自身の身で独占できるのに、それとも、その少年少女とやらは、何か特別な力か何かでも持っているのか？」

ロウンがそのことを疑問に思ったのか、そう言った。

「ふふっそうですね、確かに相手がただの少年少女なら、別に私だ

けで片付きます、しかし、私は自らの利益を分散してでも、同時にやりたいことがあるのです」

「ほう…それは何ですか？」

「…3年前、私はある冒険者によって、私の所有する奴隷達が逃がされたのを覚えていますか？」

「ええ、確か、あの奴隷は不法奴隷でしたすね、そのために逃がされても文句が言えず、結局逃がしてしまった事件ですな、それが如何したのですか？確かあなたの奴隷を逃がしたパーティーは、相当の腕お持ち主たちで、とても貴方だけでは手出しできなかったはずでは？それで結局は仕返しをあきらめた」

「そう、実はそのパーティーが今回、このジュートラスの町に来るのですよ」

「…ほう、つまり何ですか、その少年少女から奪った高性能な物を分け与えてやるから、そのパーティーへの仕返しを手伝ってほしいと…」

「ああ、そう言うことだ、ビョーシェ商人ギルドの頭、ロウンさんならあの忌々しいパーティーを捕まえることだって可能だろう、そして、その報酬として、あのまじっくペンを持っている奴らから奪った物で得られる利益の比率は、お前が7で俺が3だ、これでどうだ？」

「…いいのですか？それで…貴方にしては恐ろしいほど譲歩しますが…なにかそのパーティーを捕まえなくてはいけない、理由でもあるのですか？」

「…利益は比率で7…3だ、これ以上のこと言う必要はない」

「…分かりました、では、さっそくその少年少女の捕縛と、あなたの復讐を手助けしましょう」

「…ありがとうございます」

ヤルトーは笑顔でそう言った。

「ちゅんちゅん」

何故か異世界でもお馴染みらしい、鳥の鳴き声と共に、真は起きたのであった。

「…」

もちろん、ソラが真のベットに潜り込んで、すやすやと寝むっている展開などもなく、そして、そのようなことも考えてもいなかった真であった。

「…」

昨日は散々な日だったなど、真は思い出していた。

「…」

真はとりあえず、ソラのベットを見た。

ベットの上にはソラが眠っていた、どうやら真の方が早く起きた様子である。

「…」

「すぴー」

まるで天使のような笑顔で寝ているソラ、それは精神が弄られていた真をもってしても脱帽するほどの程の物であった。

「…かわいいな」

真はソラの寝顔を見ながら、考え深げにそう思った。

「…これがこの世界の朝食か…別に変わらないと思うけど…」

真は現在ソラと一緒に宿がだしてくれた朝食を食べていた。

「…」

真の目の前にはソルボージェという、スクランブルエッグに似た食べ物置かれてあった。

別に見た目も悪くないし、たんに名前だけが違うだけではないか？
そう思った真であった。

「ぜんぜん、別物よ、確かに味こそは別に真の世界の料理と変りはないけど、魔法香辛料とかが使われているから、うん…なんていうか、この魔法香辛料の違和感ってなかなか言葉に表しにくいよね…とりあえず食べてみて」

「それじゃ、いたたきます」

そう言って真は横にあったフォークを取り出し、ソルボージェを口に運んだ

「…」

もぐもぐと、真はこのソルボージェとか言う食べ物の味を確かめなるべく良く噛んでいたのであった。

そして、ソラが言っていた違和感とやらが直ぐに訪れた。

：あれ？ん？なんだかあれだな、別にまずくもないし、どちらかと上手いのだが：幻想的な味？

真はこの味を感じてもしやと思った。

いわゆるこの世界の魔法香辛料とやらは、言わば人間が作り出した香辛料である、自然が作り出したというものではない、そして、どうやらこれら魔法香辛料を作る人たちは、どうしても口に合うような、無理やり合わせるような：不純物など一切なく、いわゆる人間の口に完璧に合うような：簡単に言えばあまりにも完璧すぎて、カップラーメンみたいな程良い味ではないのである、まあ、まさしく言葉で言い表しにくい、そんな違和感を感じる、そのような感じの味であった。

「：なあ、ソラ」

「ん？」

「：もしかして、自然からとれる香辛料、トウガラシとか、コシユウってとても高価なの？」

「もちろんだよ」

ソラが何当たり前なことをいっているんだと言う感じに言った。

「：マジックペンじゃなくて、香辛料にすればよかったかな」

そう思いながら、真はソルボージェを口に運んだ。

「…よし、さっそくダンジョンで使う近代兵器を召喚するとか」「面白そうね、異世界の武器ってどんなのだろう」

その後は別段なにもおかしいこともなく、真たちは朝食を食べた後、さっそく、今日行く予定のダンジョンへ向けての武装を召喚するため、真とソラはそんな話し合いをしていた。

「…よし、まずは…山崎真が命ず、兵器大全集1を召喚せよ!!」
真はまず、1868年までに使えそうな兵器を調べる為、自らが知っている本の中で、より兵器に関して詳しく書かれていたものを召喚した。

「しゅあん」
いつもどおりに、ワープしたかのように、忽然と、戦艦三笠の写真が表紙の兵器大全集1と言う本が召喚された。

「…ん？その本は？…まさかこれが近代兵器!!」
ソラがそんな的外れなことを言う
「いやいや違う違う、これは近代兵器じゃなくて、ただの本、この本には俺の世界にある古今東西あらゆる昔の兵器がのっている、いわば兵器の専門書みたいなものかな？兵器の写真はもちろん、その兵器の戦歴、評価、性能等一つ一つ丁寧に描かれてあるんだ」
真は簡単な説明をした。

「…ふんー、つまり、その本には真の世界の武器が有って、召喚する際に役立てよう？」

「まあ、そんな感じかな」

「へー、じゃあ、まず何を召喚するの？」

ソラが面白そうに本を覗き込んだ

「まあ、まてまて、そう焦んなよ、まず俺が選ぶから」

そう言って真はソラをなだめた後、兵器大全集1の1868年あたりのページを開いた。

（うん：一番使えそうな兵器は、やっぱりあの映画、ラストサムライにも登場した、ガトリング砲だよな）

真は本のページを開きながら心の中で呟いた。

ガトリング砲とは、言わば現代の機関銃の原型とも言うべき兵器である、といっても、現代の様に、持ち運べるほど軽くも小さくもなく、大八車の様な物に、でっかいバルカン砲をのつけたような様なものである、もっとも、この世界ではそれでも結構な威力を発揮するであろうが…

（しかし、ガトリング砲の様な大きなものは、とてもじゃないが、馬や車がないようじゃ、手軽に持ち運べるような代物じゃないし、そのため、人力で運ぶ場合、ダンジョン内で、召喚すると言う道しかないから、今は召喚することはできないよな：だけど、ダンジョン内に階段とかそういうのが有れば通行できないしな…）

真は思う思い、ダンジョン内にガトリング砲の邪魔になりそうな階段とかはないのかをソラに聞いてみた。

「なあソラ、ダンジョン内には階段とかある？」

「…階段？なんでまた？」

「うん：移動するのに大八車を使う武器を召喚したいんだよ、大八車じゃ階段を上り下りできないだろう」

「…ダンジョン内には、階段は滅多にないけど、一階から二階に行くときは、階段を使うわ、だから、使うとしても、その階限定ね、大きさによるけど」

びみよーな答えが返ってきた

（うん：階段とかやっぱりあるか、これは実際にみてみないと分からないな）

結局真はガトリング砲の召喚をやめ、次にライフル銃や騎兵銃などの、持ち運びのできる兵器を探した。

（うん：ヘンリー銃かスペンサー銃か：ここら辺が銃の良さそうなところかな：ん？）

その時真はある写真の部分に注目した、その写真には、銃剣が移されていた、銃剣とはいわゆる、銃の先ちょにナイフ見たいな簡易的な刃物をつけて、ライフル銃などを簡易的な槍にした様なものである。昔は弾がなくなると、白兵戦になることがあったので、昔の銃にはよくこういう機能が有ったのである。

（：銃剣って、近代兵器の部類に入るのか：分からんな）

真はとりあえず、一応、確認のためとして、この銃剣が取り付けられている銃ごと、召喚することにしたのであった。

（まあ、とりあえず、銃はヘンリー銃か、スペンサー銃かを決めてからにしよう）

真はそう思い、とりあえず、その二つの銃が有る場所のページを覚えて後、次に爆弾はどうなのかを調べた

そして、ノーベル賞を作った人の写真と共に書かれてある兵器を見つけて真はふと思いついた。

（ダイナマイト：おっそうだ：）

真はあることは思いついた、

（ダイナマイト＋どこでも好きな所で道具を使わずとも火を出せる火の魔法、これいいんじゃない？）

珪藻土ダイナマイトの欄を見ながら真はそのことを思いついた。

（よし、とりあえずは、銃は装填数が多いヘンリー銃に決定、ダイナマイトは、ライターを使えば手軽で簡単に使えるし、ライターを

使わなくても、魔法で火を出せるソラに渡せば、かなり使えそうだな、ソラにこの事を話してみるか」

真はとりあえず、武器の方針については大体固め、次に、結局手に入れることのできなかった防具代わりの、戦闘服なんかを探してみた。

（うん…あまりないな）

もともとこの方は武器専用であり、やはり、防御面のための戦闘服なんかはあまり書かれていなかった。

（…まあこれでいいか）

真がそう思った時に開いていたページは、米軍のボディーアーマーの欄であった。防弾、防刃、そして耐衝撃性にもすぐれ、なお且つ動きやすく設計されてある、これでも良いかな？真はそう思い、防具の代わりとして召喚するのは、このボディーアーマーと、自衛隊の８８式鉄帽（いわゆる軍用ヘルメット）にすることにしたのであった。

「…よし、召喚するとしますか」

因みに現在の真の召喚数は６である、これらを召喚するのは当たり前だが、予備の弾等の弾薬も想定して召喚するなら、直ぐに使いつぶしてしてしまうような数であるが、仕方ない事だと、真はそう思い、腹をくくって召喚することにしたのであった。

「山崎真が命ずる、銃剣付きのヘンリー銃を召喚せよ！」

すぐさま真の目の前に銃剣付きのヘンリー銃が表れる

「山崎真が命ずる、自衛隊の８８式鉄帽を召喚せよ」

まあとりあえず、こんな感じで真の武装が次々と召喚されていったのであった。

「どうだソラ、カッコいいか？」

数分後、すっかり見た目は軍人と化した真が立っていた、このようなことになってしまったのは、決して作者のせいではない…はず…

頭には自衛隊の88式鉄帽（迷彩柄）胴体には米軍のボディーアーマー（服の迷彩柄はさすがに怪しすぎるらしいので、素朴な灰色のバージョン）片手には銃剣付きヘンリー銃である。

（…すげーな、なんかこのヘンリー銃を持っているだけで、この銃のすべての事が何故か判るし、それに銃剣も近代兵器として認識されるみたいで、銃剣についてもどう扱えばいいのかも分かる、変な感覚だ）

真は今までの17年の人生の中でも感じたことのない感覚に、おちよつとばかり不安であった。

「うん…」

まあ、とりあえず、現在ソラがそんな360°どこから見ても軍人に見える真を鑑定していた。

「…真」

「ん？」

「…もうちょっとセンスのある真の世界の軍服とかない？」

どうやらこの世界の人々にとって、現代の軍服姿は異様に映るようであった。まあ、現代日本でもこんな恰好して街中歩いたら、注目の対象になるだろうがな！！真は半ば悲しみながらそう思ったのであった。

ダンジョンへの序章と、裏で進む陰謀（後書き）

作者は気の短い奴なので、感想&評価がないと落ち込みます。

どうか、感想、評価、お気に入り登録、コメント、意見をください。

作者にとって、自分の作品が評価されるというのは、死ぬほど嬉しいことですから

ドウトルーズ（前書き）

至極簡単な武器紹介

ヘンリー銃

1850年代後半にベンジャミン・タイラー・ヘンリーが開発したレバーアクションライフルである。

アメリカの南北戦争において、正式装備ではないはずなのに、多くの北軍兵士に使われた銃である、

この銃の強みは銃弾の装填数が多いことである。

88式鉄帽

いわゆる軍用ヘルメット、鉄と書かれているが、鉄は使われておらず、耐弾繊維の複合素材で構成されているらしい、自衛隊の主要軍用ヘルメットである。

ボディーアーマー

いわゆる防弾チョッキと言われるもの、作中のは小銃の徹甲弾を停止させるNIJ規格レベルIVクラスのものである。

ドットルーズ

ダンジョン…それは、まさしく、ファンタジーの代名詞たるもの、モンスター、宝箱、冒険、魔法、と、ファンタジーならではの洞窟である。しかし…

「ざっ」

と、何やらそのようなファンタジーな雰囲気…

「あー」

ぶち壊すような奴は言った。

「まさか、米軍のボディーマーと、自衛隊の88式鉄帽と、ヘンリー銃をもって、ファンタジーな世界において、90%くらいの確率で存在する定番中の定番、ダンジョンに行くこととなるとは…現実とは物語より奇なり、というか、日本にいるときは想像もなかったけどな」

そう、真が言っている言葉通り、現在真は、このファンタジー感あふれ洞窟を攻略するため、片手にヘンリー銃、背中に、予備の弾やダイナマイトが入ったリュック、ボディーマー、88式鉄帽を付けた、場違いにも程がある人間、山崎真が、そのファンタジー感あふれる洞窟、ダンジョンへと潜入を試みようとしていたのであった。

「…」

真はとりあえず、あたりを見回した、目の前にはダンジョンの入り口とおもわしき高さ7メートル、幅10メートル位の洞窟があった、そして、その洞窟の周りには、小規模な木で出来た言えなどが立ち並び、沢山の人やら、別の種族であふれ返っていた…しかも、どう

やらここににいる人達は、全員、ダンジョンに用が有る人なのか、剣やら槍、弓などで武装した人、ローブをまとった魔術師などがいた、銃で武装しているのは真くらいである、当たり前であるが：

しかし、とりあえず、やっぱり真の服装は目立つのか、所々その、ファンタジーな人たちがちらちらと、盗み見るように真を見ていた。

「なあソラ、ダンジョンってみんなこんな感じなのか？」

「違うわよ、確かに町の近くにあるダンジョンは大体こんな風に建物とかが立って、人手に賑わうけど、全部のダンジョンがこんなでつかい洞窟形式じゃないわ、モグラの穴みたいな場所が、ダンジョンの入り口だった時もあるしね」

「ふん：」

真は、そんな感じに、ソラの言葉を聞いていたのであった。数分ほど、歩いている、真たちの目の前に、なにやら、沢山の人だかりが見えて来た。

「ん？ソラ、あそこに大量の人混みが有るけど、なんだ？」

「なんだろう：私にも分かんない：だけど面白そうね、真、行ってみよう！」

「おう、いいぜ」

真たちは人混みめがけて突き進んで行った。

わーわーと、真の目の前には、大量の人混みにあふれ返っており、いまにも、巻き込まれそうである、真はこの人混みを見ながら、夏コミを思い出していたのであった。

「あの、すみません」

真がそんな風に元の世界に思いをはせていると、ソラがどうやら、この人だかりは何なのかを聞いていた、聞く相手はどうやらエルフの男性みたいである

「ん？ なんだお譲ちゃん？」

「この人だかりは何ですか？」

ソラは未だに衰えを見せない、まるで津波の様な人だかりを指差しながらそう言った。

「ああ、なんだお譲ちゃんたち知らないのか？ 今、Aランク級の称号を持つドゥットールズという、名パーティが来てるんだよ、お譲ちゃんも知ってるだろう？ とても強いドラゴンを倒したことで有名な：おっお譲ちゃん運がいいね、こっちに向かって来たぜ」

エルフの男はそう言うと、どうやら、こっちに近づいて来たらしいドゥットールズとかいうパーティの居るらしき方向を見つめた、真もAランクという高ランクを持っている奴って、どんな奴らだ？ そう思い、眼を凝らしてエルフの男が見ている方向に目を向けた。

眼の先には、集団の中心に居るらしき五人の集団が居た、特徴を述べるとすれば、リーダー格なやつは、金髪と、青色の瞳の年齢としては20代位のイケメンな剣士で、エルフである、他には赤髪をポニーテールにした弓使いらしき人物や、他に魔術師っぽいのが二人、この魔術師たちは一人は女の人で、もう一人は男だった、次は、でっかいハンマーみたいなを持った大男である。

「：」

（Aランクとなるとどれくらいの強さなんだ？）

そう思った真は有言実行、さっそく彼らのステータスを表示させて見た。

名前 ？？？？

種族 エルフ

職業 魔術剣士 冒険者

LV208

称号 ドラゴンキラー

「…やっぱりなんだよな」

真自身実は気になっていたことが有った、それは

「…ステータスが何故かソラの時みたいにな、精密に測れないんだよな」

そう、真はこの街に入ってから、試しに他の人のステータスを見てはいたのだが、このように、何故か簡単な物しか分からないのである。

「…ま、しょうがない、諦めるしかないだろう」

なってしまったものはしょうがない、そう思った真は、それでやめた後、次に、赤髪のポニーテールのステータスを見てみた。

名前 ？？？？？

種族 人間

職業 弓使い 冒険者

LV50

「…あれ」

なんでだ？真はそう思った。

（隊長がLv208で従者がLv50って…なんかあまりにもの差が有るのだが…）

それに、確かこのパーティはドラゴンキラーとか言われていたが、隊長しかドラゴンキラーの称号を持っていないのでは…真はそう思った。

「…」

試しに、真は他の奴らのステータスを見てみた。

名前 ????????

種族 人間

職業 魔術師 冒険者

Lv56

これは、女魔術師のステータスである。

名前 ????????

種族 人間

職業 ハンマー使い 冒険者

Lv67

これは、あの大男のステータスである。

名前 ????????

種族 人間

職業 魔術師 冒険者 一部データが改ざんされています。

Lv70 データが改ざんされています。

これは男魔術師のステータスである。

「…」

やっぱり隊長以外は称号、ドラゴンキラーの称号を持っていない、なんでだ？パーティ全体で倒したのなら、全員が持っているはず、それに、このあほな程のレベルの差、何かおかしいな…あと、男魔術師のやつはLvと職業に、データが改ざんされていますとかある…謎は深まるばかりである。そのことを聞きたいという思いもあるが、まさか直接聞きに行けるはずもなく、ただ見守ることしかできるはずもなしな…真はそう思った。

「ソラ、あのドウトールズ？だったか？どういう奴らなんだ？」

真は同じく、眼を凝らしながら、ドウトールズを見ているソラに向かって言った。

「うん、まあ聞いたことはあるわね、たしか、北の方にある、オスローデニアという町で、上級クラスのドラゴンを倒したチームとして、かなり有名よ、まあAランクの時点で、実力は相当なものだけど、まあ、一言で言えば、この世界でもトップクラスに腕の立つパーティーなのよ」

「Aランクってそんなにすごいのか？」

「凄いも何も、Aランクはこの世界には100パーティ居るかいないかだよ、凄いに決まっているじゃない」

「…え？じゃあSSSランクは？」

真はAランクでそれなら、SSSランクはどうなっているんだと思いい、ソラに聞いてみた。

「…ああ、そう言えば行っていなかったわね、SSSランクは一万年以上前に存在していたと言われる勇者だけが持っていたとされて

いるわ、勿論今はSSSランクなんて持っている人はいないし、今存在する最高ランクの人物でも、Sランクが最高、それも、Sランクの人間はこの世界でも一桁くらいしかないのよ」

「…」

どうやらギルドランクを上げるのは大変らしいと真は思ったのであった。

「まあ、とりあえず、ダンジョンにさっさと行くわよ、それとも、ドウトールズのサインでもほしいの？」

「いや、別に欲しくはないけど」

「じゃあ、さっさと行こう！」

ソラはそう言っていると、真ともにダンジョンに向かって行った。

「ねえヨセフ」

赤色のポニーテールをした、弓使いの少女が言った。

「なんだいミミ」

隊長とおもわしき人物、金髪で青い瞳をした、エルフの男、ヨセフは言った。

「あそこにいる男の子、超可笑しな格好してるんだけど、あんな格好初めて見るわ」

ミミと呼ばれた少女はちょっと笑いながら、その可笑しな格好をしている男の子が居る場所を指差した。

「ん？」

ヨセフはミミが指差した方向に目を凝らした。

「…なんだあの服装は、そして頭にかぶっている可笑しな模様の丸い帽子、そして、抱えているのは鉄でできた奇妙な棒か？可笑しな奴だ」

「ねえ、可笑しな奴でしょ、どこの国の人間かな？」

「さあな、確かにあんな格好をした奴を、いままで数十年と旅をしてきた俺をもってしても見たことがない、ミミ、確かにお前の言う通り、可笑しくて変な奴らだ」

「盗賊かな？」

ミミが冗談下にそう言う

「ふっ、盗賊があんな格好するかよ、盗賊でももっと合理的な服を着るわ、ふふ、まあ冗談はさておき、ミミ」

ヨセフは少女の名前を言った後、おかしい男を見るのをやめ、ミミの方向を向いた。

「あんなおかしい男など、俺たちにはどうだっていい事だ、それよりも今回わざわざこんな場所まで来た目的を忘れるなよ」

「分かってるってヨセフさん」

「それと…」

「ん？」

「あの昨日緊急的に俺たちのパーティに限定的に入ってきたあの男、ちよつとばかり怪しいな」

「ああ、魔術師のラテさんですか」

「そうだ、突然ギルドの上層部から、彼は今回、ドゥットルーズに限定的に入って戦いを学びたい青年なので、一ヶ月間よろしく、といわれて結局入れざる負えなかったのだが、なぜか、私の本能が怪しいと感じるのだ」

「そんな、考え過ぎですよ、ギルドの後ろ盾が有るし、たぶん、ギルドに多くの金を送っている貴族の息子か何かでしょう、私たちはAランク、貴族にとって、実力のあるパーティに息子を送りたいと

いう思惑もあるでしょうし、これまでもそう言う事、有ったんですよね」

「…まあ、そうだな、俺の考え過ぎか…」

ヨセフは考え深げにそう呟いたのであった。

ドットルールズ（後書き）

次こそ…ダンジョンに突入させたい！

ダンジョン（前書き）

至極簡単な登場人物紹介

ソルデスト・ヨセフ

ドットルーズのリーダー、リーダーらしく、チームの心配や、チームとの交流を何よりも大事にしているらしい、金髪青眼のエルフである。

武装は今のところ分かっているのは、背中に背負っている、二メートルはあろうかという大剣である。

過去に何かしらの、悲惨な出来事を体験したらしい。

ドラゴンキラーの称号を持つ。

ダンジョン

ダンジョン内は一言で言うと、何故か明るい、真はそう思った。

具体的に言えば、整備された地下通路に似ているのだけれども、電灯らしきものがないのに、何故か明るい、結構整備されているのである、まあソラによると、それこそ、鍾乳洞みたいにまったく整備されていない場所もあるらしいし、視界ゼロの暗闇の場所もあるらしい、まあ、とりあえず、このダンジョンの場合は、1Fから10Fまでは、ちゃんとこれくらいは整備されているらしい。

「ソラ、ダンジョンにいるモンスターって、どんな感じに出てくるんだ？」

ゲームで歩いていたらちゃららら〜んと言う効果音とともに画面がゆがんで戦闘開始というわけではないだろうし、実際はどう出てくるのだろうかともい、真はソラに聞いた。

「どう言う感じって普通に現れるだけだけど」

ソラが何言ってるんだ？と言う感じに言った、真はそのソラのその顔を見て、なんだか悲しくなっていくような感じがしたのであった。

「なかなか現れないな…」

（ダンジョンに入ってから十分くらい経過したのだが、まったくモンスター現れないな…もしかして、俺嫌われているのか…モンスターに）

真はついそんなわけのわからないことを思い始めるのであった。

「…そうね…そうそろそろ現れそうだけど…あ…」

突然何かに気づいたように呟いた。

「探索マジックにモンスターらしき影がヒットしたわ、敵モンスターは現在30メートル前方に…」

「なー!」

真はどうやら、ソラの探索マジックにモンスターが引っ掛かったのだと思い、すぐさまヘンリー銃を構えた、ソラも、真剣な顔でレイピアを抜く、表れたのは…

「あれは…コボルトか？」

確かに30メートルくらい前に、子供くらいの大きさのナイフを持った、でかい鼻に、灰色の肌、ゴブリンの小型バージョン?の様な奴が表れた。

「…」

とりあえず、真はあのコボルトらしき生物のステータスを開いた。

コボルト

レベル5

初級モンスター ランクG

HP	17
MP	0
魔力	0
攻撃力	7
防御力	8
魔防御	10
精神力	22

称号	なし
武術技	持っている刃物で切りつける 肉体技
現在地	シュートラスのダンジョン1F
装備	コボルトの短剣
道具	なし

次のレベルまで ????

なるほど、どうやら俺のウィンドウズ機能は、どうやらモンスターに対しては正常に機能するらしい、なんでソラに効いたのだろう、仲間だからか？まあそれは置いておいて、このコボルトとやらはステータスを見る限り、ゴ布林よりはよわい、俺より強いけど…

その悔しさを燃料に、真はコボルトにヘンリー銃を向け、当たるように、狙いを定めた。

「…」

真はゴ布林に標準を付けた瞬間、頭の中なのか、それとも体全体からなのだろうか、よく分からないが、自分の中に何かが流れてくるのを感じた、普通なら気をそらしそうだが、精神をいじられた真はそんなこと有ってもない様なものであった。

そして、真の頭の中に突然、ふと何かが浮かんだ、（当たる…）と…

「ダン!!」

そのことが浮かんだ瞬間、真はヘンリー銃の引き金を引いていた。

「ドサッ…」

と、その音と同時に、コボルトが倒れたとおもわしき音が、空しくダンジョン内に響き渡った。

「…」

「…」

「さすが…異世界の武器…魔法なしで遠距離攻撃が可能だなんて…」
沈黙を破ったのはソラだった。

「銃なんて概念私たちの世界にはなかったからどういう攻撃なのか全く分からなかったけど、さすが真の世界の武器、期待以上の威力を持っているなんて…」

ソラは驚きのため息をつきながらそう言った。

「…まあ、ソラ、あまり自己過信に陥らない方が良いと思う、相手がコボルトだったからこそ効いただけかもしれないし、コボルトのほかにも、全く別のモンスターだっている、油断はできない、もしそう言うやつが現れたら、ソラよろしく！」

精神をいじられたせいか、喜ぶよりも、冷静にそのことを分析してしまう、真であった。

「…まあ、確かに油断はできないかもね、だけど、ここにいるモンスターは、コボルトよりちょっと上ぐらい強い位だし、それに、いつまでも神経を尖らしても、精神的に披露しちゃうし、のんびり行こうよ、真」

ソラが何故か肩を触りながらそう言った。

「…いや、俺の精神は大丈夫だって…」

弄られているから、全く精神的には疲労しない、そう真は言おうと

したが。

「はあ、だめだめ、とりあえずいい？のんびりと、楽しく行くの、分かった？」

「：へいへい」

真はどうせ説得しても無駄だと思い、そして、別にそこまで嫌がることでもないので真はそういった。

「それでよし」

ソラはそう満足した後。二人はダンジョンの奥へと入り込んで行った。

「ヨセフさん、もうそろそろ良いのでは？もともとこのダンジョンに入ったのも、誘導するための物だけですし、そろそろ出て言っても無難かと」

「うん：もう少し引き延ばした方が良いのでは？ラベス」

一方此方はドウトルーズのメンバーである、彼らもまた、ダンジョンに入ったのである、しかし、その目的は真たちとはずいぶん違うみたいであるが。

「いえ、ヨセフさん、私もラベスさんと同じ意見で、もうそろそろ良いかと、我々がここに来た目的は、3年前に見逃してしまった違法奴隷を扱った商人の捕縛です、このダンジョンに入ったのも、その商人がいらぬ警戒を抱いて逃げ出さないよう、このダンジョンに視察に来たという偽りの目的が有っただけです。我々がその商人の存在に築いていないように見せかけると言う目的も含んで、そして、

おそらくその商人は私たちが気づいていないと言う事に気づき、ヨセフさんが3年前、奴隷を解放する際に偶然手に入れてしまった物を取り返しに来るだろう、と、そして、その瞬間を取り押さえる、そうですね」

ニコニコした笑顔でラテがそう言った。

「…ああ、そうだが」

「それにしても、本当にその、ヨセフさんが3年前偶然手に入れてしまった物をその商人が奪い返しに来るものなのでしょうか、甚だ疑問なのですが」

ラテがもう一度確認するようにそう言った。

「…大丈夫だ、それに関しては問題ない、奴は絶対に取り戻しに来る、こればかりは確定だ」

「ちなみに、その物は何処に」

「ん？なに、キッチンと肌水離さず持っているさ、これなら絶対に盗まれたりしないからな」

「…そうですか」

ラテはいつも通りにニコニコした笑顔を浮かべながら、それ以上の追及はやめた。

「あの、ヨセフさん、そう言えばその3年前にその、商人から奪った物って何ですか？気になります」

ミミがふとその話をききそう不思議に思ったのか、そう言った。

「…さあな、こればかりはお前たちにも話せない、すまないがな」ヨセフは、すまなさそうな声でそういった。

「…そうですか」

ミミは残念そうな声で言った。

「まあ、とりあえず、戻るとするか、こんなダンジョンじゃ、修行

にもならんことも事実だしな、地上に戻るぞ」

「了解」

メンバー全員がそう言ったあと、彼らは地上に向けて歩き出した。

「…」

因みに、終始ラテは何故か笑顔でいた。

「ダン！」

「しゅ」

核の部分に銃弾を受け、蒸発していくスライム：今のところはゴブリンを3体、スライムを4匹、キャタピラーとか言う芋虫に似たモンスターを2匹倒している、まあ簡単に言えばヘンリー銃無双である、せっかくダイナマイト持ってきたのに、ダイナマイトを持ってきたのは過剰だったか？と真は思った。

「…真が凄すぎて私の出番がないんだけど」

ヘンリー銃を使つての遠距離射撃の活躍で、全く活躍できていないソラが不満そうにそう言った。

「したかないだろう、近接戦闘は俺は苦手だし、こうして銃を使つての遠距離攻撃を行った方が、安全な上、簡単に倒せるし、ソラもそう思うだろう」

「まあ、そうだけど」

真のその合理的なその言葉きいても、やはり何かしらの不満は残る

のか、ソラは機嫌悪そうな感じにそう言った。

「：そう言えば、ドロップアイテムっていつになったら出てくるんだ？かれこれ9匹位倒したけど一つも出てこないけど」

「ドロップアイテムは、スライムのようなG級モンスターの場合、10匹くらい倒して、ようやく1つ出てくるか出てこないかよ、逆に言えば強ければ強いほど、ドロップアイテムを落とす確率が高くなるのよ、落とすアイテムの価値もちがってくるの」

つまり、スタイムの様なG級モンスター倒した位では、そう簡単にドロップアイテムは出てこない、出ても、そこまで価値あるものは出てこないと言った所か、真はソラの説明を聞きそう思った。

「なあ、ソラ」

「なによ」

「：なあ、今度はソラがモンスターを倒してくれよ」

真はソラがいつまでたっても不機嫌そうなので、宥めてた方がよさそうだと思う、そう言った。

「いいの？」

「まあ、弾ももったいないし、そもそも、ここには実戦経験を高める為に来たんだ、ソラも戦わなきゃ、意味がないだろ」

真は、一応、本心からもそう持ったので、この機にそのことを言うことにしたのであった。

「：ふふふ」

何故かソラは不敵に笑いながらそう言った。

「見てなさい、私もその、へんりーじゅうとか言う武器に劣らないほど、つよいということを！」

ガッツポーズを上げながらソラはそう言ったのであった。

「：」

機嫌直るの早！と真は思った。

「居た！」

数分後、再びソラお得意の探索マジックにより、モンスターを見つけた時の合図？とも言える声をソラが出した。

「あそこ！ちよつとばかり整備されていない通路の右側！」

（うん？右側？）

真は自らのいる通路の50メートル前方にある右側に行く道が有ることに気づいた。そして、その通路の中に：

（あ、確かにあれは）

そこにはスライムとおもわしきモンスターが居た

「ふふっ、真は私の後方支援として、居るだけで良いから、あのスライムは私に倒させて」

「分かってるって」

別に、すでにそう約束たんだし、別にわざわざそう言わなくてもと真は思った。

「とりゃー！ー！！」

「ちょ！おま待て…」

次の瞬間、ソラが、日本軍銃剣突撃よろしく、レイピアを抜き、それを高々と上げた後、スライムに向かって走りだした。

「ストレス発散——！！！！」

「…」

どうやら魔法攻撃より、ストレスが発散しやすいからあんな攻撃方法をとったようだ、て言うか何でストレスたまってるんだ？真はそ

う思った。

「そして早…あの速さはどこから来るんだ？」

そして、その速さはおそらく、魔法を使っているのだろうか、まさしく風のごとくでもあった。

しかし、ソラの気配に気づいたらしいスライムがソラの気迫に恐れをなしたのか、逃走を図った。

「さて—————！！」

もちろん、そのスライムを見逃すはずもなく、真おいてきぼりで、そのまま、ソラはダンジョンの奥へ行ってしまった。

「……………」

あれ？

「って…」

（あれ？やばくね？これパーティ分断フラグじゃねえ？）

そう思った時にはもう遅く、ソラははるかかなたの場所に行ってしまったのであった。

「なるほど、ダンジョン内で捕まえる：そう言う事ですか」
またまた場所は飛んでとある館、その中央にある部屋の中で、ヤルトーが納得したように言った。

「そうです、地上じゃ誰かが助けに来る確率が有りますからね、目撃されてしまう確率も、しかし、ダンジョンならその心配も少ない、そして、ダンジョン内ならば、彼らが消息を絶ってしまったとしても、何者かが連れ去ってしまったという声ではなく、モンスターにやられてしまった、という事の方が大きくなります、そしてそれは、もしもの目撃者にも言える事です」

ロウンが自信ありげな声でそう言った

「しかし、それでもやはり無理があるでは：彼は腐っても名のある冒険者です、ダンジョン如きでやられてしまった、などと、他の冒険者たちは考えてくれるのでしょうか」

ヤルトーは心配そうにそう言う

「大丈夫です、たしかに、このシュートラスのダンジョンは初心者向けとして知られていますが、いくら初心者向けといえどもダンジョンはダンジョンです、奥に行けばいくほど、難易度が跳ね上がります、ギルドを操って、ドゥットルーズはその底なしの冒険心をもつてして、ダンジョンの奥深くに行き、やられてしまったと発表させれば、それでおしまいですが、彼らは別に、このダンジョンの奥にはいかないとは言っていないですし、それに表上の彼らの目的は、ダンジョンの探索です、奥に行ってしまったと発表しても何ら怪しまないでしょう、現にそう言う事は実際に何回かありますからね」

「：なるほど、分かりました」

「理解いただき光栄です、さて、次に彼らを捕縛するために派遣した人物についても言いましょう」

ロウンがなにか面白そうな笑みを浮かべながら言う

「今回、私たちが使った人物の名前は、ジュークフと言う17歳くらいの少年です」

「少年ですか…」

ヤルトーが驚いたように言った。

「ええ、ですがただの少年ではありません、我がビョーシェ商人ギルドが誇る、スパイ、そして、暗殺者の黄金の卵ともいうべき、才能ある少年です、彼の偽装や隠密性は、もはや我々ビョーシェ商人ギルドですら気づくのは難しいでしょう、彼なら、いとも簡単に奴らを捕縛してくれるでしょう」

「なるほど…栄誉あるドゥットルーズの最後は、そのリーダーよりも年が下の少年によってもたらされるか…可哀そうにな…」

「ええ、ですからせめて、彼らはダンジョンの底にいる、正体不明の最強のモンスターにやられてしまったという、名誉ある死を発表しようと思うのだ」

「ふふッ、ロウンさんは優しいですね」

「いえいえ、我々が利益を得る為の、単なる手段ですから」

ロウンは無気味な笑みを浮かべながら、自らと同じく、無気味な笑みを浮かべているヤルトーに向かって言ったのであった。

「…奴を捕まえ、あれを手に入れば」
しかし、ヤルトーの笑みの意味は、どうやら、別の意味も含まれて
いるようだった。

「魔王様…」

ヤルトーは、誰にも聞こえぬ声で言った。

ダンジョン（後書き）

評価&感想&コメント&お気に入り登録をどうかよろしくお願いします。

ドットルーズの危機（前書き）

遅くなっていました…

ドゥットルーズの危機

「はぁー」

「うん？どうしたミミ？」

一方、真がソラと離れ離れになっているころ、ドゥットルーズは地上へと歩き出していた、その途中、ミミが突然ため息をついたのである。

「あのね、ヨセフ：なんて言うか、私には出会いがないのよ」

ミミが何やら懂れるように、腕を組みながら言った。

「出会い？」

ヨセフが良くわからなそうに言った。

「そう、ヨセフは、私が伝説の勇者に関する話が好きだって分かっているでしょう？」

「ああ、ミミはそれを毎日読んでるからな」

「そう、そのお話の中で、何の関係もないとある平凡な女冒険者が勇者に惚れる場面が有るのよ」

「：ほう、どんなふうに惚れたんだ？」

ヨセフは恐らくその事を話したいのだろうと察し、気前良くそのことについて質問した。

「ふふっ、そう！そのとある女冒険者は、ダンジョンを冒険中に強力なモンスターに襲われ、危機に陥っちゃうの、勇敢果敢にその女冒険者は自らのパーティーと共に闘うんだけど、敗れてしまうの、仲間も瀕死の状態になり、このままではパーティー全滅まじかだと言いう時！」

ミミはいったんそこで話を切り

「そこに彼女の目の前に、勇者が現れたの！」

ミミは腕を組みながらきやーきやー言い始めた、真に純粋な少女である。

「…なるほど、その勇者はそのとある女冒険者を助けて、で、その女冒険者はそれを気に勇者に惚れてしまったと…」

「そうなの、はあっ！憧れるわ」

「…」

ヨセフはそのミミの様子を見て、なるほど、つまり、ミミは自らもそんな状況になり、勇者様に助けてもらいたいと、そういう願いが有ると言う事か…ヨセフは頭を抱えながらそう思った。

「…ミミよ、パーティーを引き率の者として、現実知らせなくてはいけない義務があるからな、非情な事を言うが、そんなことはありえん、私は決してみんなが手に負えないようなモンスターが居る場所には行かせないし、例えそのような危機に陥ったとしても、パーティー総員で玉砕するだけだ、それに勇者なんて、一万年以上前の人物だぞ、居たのかも怪しい、そのような妄想にかかれて、パーティーを危機的な状態に落とすなよ」

ヨセフはミミに配慮しつつも、生粋なパーティーを率いる者として、とても現実的な事を言うのであった。

「…はあ、分かっているよ」

ミミは、ヨセフのその話をきき、白けたようにため息をつきながらそう答えた。

「…なあ、ミミ、別に俺はお前の憧れを全否定しているわけじゃないんだ、俺にはパーティーを誰一人欠けさせてはいけない義務があるんだ、それに、お前にも出会いはあるさ、勇者なんかよりもずっと素晴らしい奴が」

「…確かに、それもそうね」

（ヨセフさんがそう言うのも無理ないしね…）
ミミは、ふとリーダーの顔を見て、何かを納得したように、そう思ったのであった。

「…そう言えばラテの奴は」

ヨセフが何故かラテの奴が見当たらないと言う感じに言った。

「ああ、ラテなら、確かトイレに行くってさ」

ラベルが言った。

「…そうか」

ヨセフはそう呟いた。

「…よし、ここらへんで良いな」

ラテはドウトルーズが見えなくなったのを確認し、とある場所ですう言った。

「ソウ…ナウ…」

そして、突然ラテは呪文を言いだし始めた。

「我が、下部よ、我に仇なす敵を撃て…上級召喚術…数多召喚…！」
ズゴウ！

と…ラテの足元に、幾数学の魔法陣が生み出された。

「…ん？」

「どうしたの、ヨセフさん」

突然声を上げたヨセフに対して、ミミは疑問に思ったのか、戸惑いの声を上げた。

「…何か来る」

「え？」

「ドゴォーン」

と、突如、ダンジョンの天井が崩れ、突如多数のモンスターが現れた。

「なっなに？」

天井が崩れる余波で、眼を開けてられなかったミミは、突然の事に混乱しながらそう言った。ミミ以外の者たちも、天井が崩れると同時に巻き起こる砂嵐に、眼をかばうように、腕を動かしていた。

「…あれは…ビックスライムに、人面オオカミだと…」

砂嵐がやんだ後、ヨセフの目の前に、崩れた天井と共に表れたのは、数十メートルはあろうかと言う巨大スライムと、胴体はオオカミで、首は人間の、オオカミであった。

「なぜ…ランクBとCのモンスターがここに…」

ビックスライムはランクBであり、人面オオカミはランクCである、とてもここで出てきて言いようなモンスターではない、と、ヨセフは思った、

「…しかも、大量にだと…ありえん」

そう、ヨセフの言う通り、見てみるだけでも ビックスライムは6匹、人面オオカミに至っては、30匹ぐらいいる…そして、これらのモンスターの姿に隠れてしまっているみたいだが、まだ他にもモ

ンスターの気配が大量に感じるのであった。

「…ちっ何故このようなモンスター多数居るのかはわからんが、倒せない事はない」

そう言つてヨセフは自らが背負っている2メートルは有りそうな大剣を握る。

「覚悟し…ごほっ」

しかし、突然ヨセフは自らのはらわたに、まるで何十発もの殴るけるを受けるような、激痛が走った。

「なっなにが…何が一体」

その時、ヨセフは今までの冒険者としての長年の経験から、すぐさま思い至った。

「…まさか」

ヨセフは言った。

「遠隔操作で作動する、魔法毒薬でも仕込まれたとしても言うのか…」
ヨセフは、恐らく自分は気づかないうちに、朝食や夕食の際に、秘密裏に毒薬盛られていたのであろうと言う結論を出した。

「…」

ヨセフは周りを見てみた。

「がはっ」

「痛い…痛い…」

他の仲間にも同様の現象が起きているようだった。

「くっ…」

（そんな…一体だれかこんなことを…）

しかし、そんなことを考えている余裕など、なかった。

「「ぶうが!!」」

そんな絶対的に不利な状況下であるドゥットルーズの事情など、知

らぬと言う感じに、モンスターたちが、ドゥットルーズに襲いかかった。

「ふふっ」

遠くから、聞こえるモンスターの鳴き声を聞きながら、ラテ：否、ジューコフは不敵に笑った。

「ふん、ただ殺すだけじゃつまらない、どうせなら意識が有る状態で、モンスターにかみちぎられろ、俺が手を出さずともな、それこそがお前らみたいな下衆に相応しい最期だ…、もつとも、今回の目的は殺しじゃなくて、捕縛だからな、今だけ、命だけは助けてやるよ」

ジューコフはそう不敵に笑った。

「死ね！！！！」

「どバ！！」

「「ギャあ！！」」

ヨセフが持っていた大剣より放たれた衝撃波は、彼らに襲いかかっていたモンスターたちを丸ごと焼き払った。

「よっヨセフさん…」

「みな、すぐさまダンジョンより離れろ、俺がこいつ等を…がっ…押さえておく…」

「しかし、ヨセフよ…」

「良いからさっさと行くんだ！俺を…俺をまた、パーティを全滅させてしまうと言う汚名を被せるつもりか！！」

ヨセフは怒鳴りながらそう言った。

「…」

「…わかったなら、すぐさま、俺を見捨ててこのダンジョンから即刻逃げろ！分かったか！！」

「…行きましよう、皆さん」

ラベルがそう言った。

「でも…ヨセフさんを…」

「今は…がはっ…そんなことを言っている場合ではありません、私もこの痛みでは治癒魔法や攻撃魔法を使えることはできません…邪魔になるだけです、それに大丈夫です、ヨセフなら、帰ってきてくれますって」

「…」

「ミミよ、行った方がいいと俺は思うでござす」
ボルトもそう言った。

「…分かった」

ミミは、目の前で自分たちのために、痛みを持こらえて戦っているヨセフをみながら、力な下げに、そう言った。

「…ちっ」

ジューコフは悪態づいた。

「まさかヨセフの野郎があそこまでタフだったとな…やっぱりそのまま俺が捕まえた方が良かったか…時間がかかるな、しょうがない…逃げないようにそして、外からもしかしたら邪魔が入るかもしれない…ダンジョンを封鎖するか」

ジューコフはそう言った後、すぐさまジューコフは呪文を言いだし始めた。

「我が下部よ、我が敵を逃すな…」

ズゴウ！

と…すぐさま、また、ジューコフの足元に、幾数学の魔法陣が生み出された。

「…あれ？」

真はふと、頭に湧きあがった疑問にそい、ふとそう呟いた。

「こんな所に壁なんてあったけ？」

真は自らの目の前にある壁を見ながらそう言った。

（ここは確か通路なんか有ったはず、それとも、ついに俺にも認知症が進行してきたのか？）

真はそんなわけのわからないことを思っていた。

「…まあ、いっか…こんなファンタジー感あふれる場所だし、こんなことが有っても不思議はないか…」

真はそんな感じに自らを納得させ、そして、ヘンリー銃を今一度担ぎなおした。

「それにしても、ソラ…何処にいるんだ？ちくしよめ、携帯でも使えればな…」

真はそんな不可能なことを言いながら、目の前の怪しい壁から、離れていくのであった。

「はあっ…はあっ、くうう…痛い」

「大丈夫？ミミ」

ラベスがお腹を押さえながら苦しむミミを見ながらそう言った。

「大丈夫…ラベスさんだって、私と同じような状況下なのに」

「そうね、ぐっ…だけど、我慢しなくちゃ、ボルトは大丈夫？」

「ガハハハっ大丈夫だ！俺は慣れて来たぞ！ハハっ…げごは…！」
そのまま、ボルトは腹を押さえながら倒れこんだ。

「無理をするからよ…ほら…早く行く…」

「ぐるるるる」

その時、彼女らの言葉を遮るように、何者かの鳴き声が響いた。

「…あれは…人面オオカミ…」

ラベスが忌々しそうに、現れたモンスターの名前を言った。

幸いにも人面オオカミはこちらの様子をうかがっているのか、今すぐ襲いかかる気配がないという事だけが救いだった。

「まずいな…」

しかし、危機が去ったわけではない、ボルトがそのことを思い出さ

せるかのように言った。

「あ…どうしよう」

ミミが心配そうにそう言う

「…ラベルよ、魔術は使えそうでごわすか？」

ボルトが何かを思い付いたのかそう言った。

「…無理よ、こんな状態じゃ、呪文に集中できない、悔しいけど、魔法を使うのは困難だわ」

ラベルが悔しそうにそう言う。

「…ミミは、どうだ？弓矢を使えそうでごわすか？」

「…うん、頑張れば…なんとか」

「…そうか、じゃあ二手に分かれよう」

ボルトはそう提案した。

「え…それはどういう」

「二手に分かれて、少しでも俺たちが生き残る確率を上げるでごわす、一つになって逃げても、どの道終わるんだ、なら、二手に分かれた方がいいのではないかでごわす。」

「…」

「一番戦えそうな俺は、ラベルと一緒に逃げる、ミミ、おまえは一人で逃げるんだ、分かってごわすか？」

「…分かった」

「ッ！でもボルト、この子が一番幼…」

「大丈夫、ラベルさん、私頑張れるから」

「でも…」

「来たぞ！！」

「「が！」」

人面オオカミはすぐさま、彼らに襲いかかった。

「行くぞ、ラベル」

「ミミミ! ミミミ!」

ボルトはミミの名前を呼んでいるラベルを強制的に抱え、逃走する。

「…くう…」

ミミも、痛むお腹を押さえながら、打ち合わせ通りに、ボルトたちから離れるべく、別の道を使って逃避する。

「「がるる!」」

人間の形をしている顔は、まるで無表情で、無気味な顔しており、そしてその無気味な顔にある口から、30センチはあろうかと言ううどろどろの唾液をたれ流しにする舌を出しながら、人面オオカミはそう叫び、人面オオカミもまた、ミミ、ボルト、ラベルを追うべく、二手に分かれた。

「…う…10匹も…」

そして、ミミの方には、10匹もの人面オオカミが追って来たのであった。

「…もう…真どこいったのよ…」

ソラは不機嫌なのか、地面を足で蹴りながらそう言った。

「結局スライムには逃げられるし、真とははぐれるし、ああ、最悪…」

頭を抱えながら、ソラはなんとなく、後悔していた。

「…確かに、私もちょっと調子に乗っていたのかも…はあ、ストレ

ス発散のためとはいえ、後先のことも考えずに…いや、そもそも私のストレスがたまったのも、あいつのせい…」

しかし、ソラのその言葉を遮るように、何者かの声が聞こえた。

「…ちっ、なかなか、奴らしぶといな、めんどいが、俺が直接手をくだすか…」

「ん？」

ソラは、すぐさま気づかれないように、姿を隠した。

「確か…捕縛対象に、17歳くらいの少年少女もいたんだっけ…まあいい、そんな奴らくらいなら、放っておいても、ここから脱出もできないだろうし、後で簡単にけりがつく、先に、ドゥットルーズを片づけるとするか」

（…なんなのアイツ…17歳くらいの少年少女って、もしかして私と真の事？…その可能性は低いとしても、ドゥットルーズを片づけるって…）

「…おっ！ふふっ、ここからなら、ボルトの奴と、ラベルの奴が一番近い…ふふっそうだ、どうせならヨセフだけ捕縛しよう、その仲間も捕まえなくてはいけないと言う命令などはない、面倒だし、ヨセフ以外のドゥットルーズは殺してしまおう、ハハッ、さて、自らが味方だと思った存在に殺されるがいい…ふふっ」
そういつて、ジューコフは歩き出した。

（…あやしい…つけてみますか…）

ソラはそう思い、ジューコフに気づかれないように、そっと、後をつけて行くのであった。

「ひゅん」

「ぎゃいん！」

人面オオカミの顔面に矢がヒットし、その瞬間絶命する。

「はっは…ぐっ」

ミミは走りながら、自らの得意分野である、弓矢を放った、体を蝕む痛みに耐え、見事屋を命中させるとは…ミミの凄さがうかがえる。

「ぐッ…えい！」

ミミはもう一度痛みを耐え、矢を放った。

「ひゅん」

「…ガウ！」

「かんっ」

しかし、そうそう上手くは行かない、今度は外れ、空しく地面に突き刺さっただけであった。

「くう…次…」

ミミはすぐさま、次の矢を弓に掛けようとする。

だが、すでにミミと人面オオカミとの距離は、もはや絶望的と言っているほど近かったのであった。

「がぶ！」

「きゃ！…！」

ついに、一番近くにいた人面オオカミがミミのすぐそばに接近することに成功し、ミミの右足に噛みついた。

「かんっ！かん…」

ミミはあまりにも痛みに、持っていた弓と矢を地面に落としてしまい、弓と矢は空しく地面に転がった。

「くウ…」

ミミは、自らに噛みついて人面オオカミの顔を見た。

無表情のその顔には、なにか恐ろしい物がうかがえる、そして、そ

の口元には、ミミの血だらけになった足が有った、そして、血だけではなく、噛む力が異常なのか、生々しいピンク色の内側の肉も：

「あああ！！痛い！痛い！」

ミミは襲い来る痛みに耐えながら、懷より短剣を取り出し、人面オオカミの頭にぶち指した。

「ぐちえ…」

「ぎゃいん！！！」

頭に短剣を刺された人面オオカミは、噛んでいたミミの足を手放し、狂ったようにのたうちまわった。

「はぁ…はぁ…」

「「ぐるるるる」」

しかし、まだ人面オオカミは8匹もいたのであった、今は様子見なのか、人面オオカミたちは、ミミを四方八方を囲むようにして、対峙していた。

「…ううう…どうしよう…」

先ほどかまれた右足から、生々しい傷跡と、そして、大量に流れ出る血…そして何よりも襲い来る焼きつくような激痛、そして、いまだに残る、腹からの激痛…あまりにもの痛みに、ミミは痛む足を押さえながら、いつの間にか、意識が遠のき始めていた。

（う…意識が…）

ミミは自らの意識が遠のいていくことに気づいた。

（ああ…死んじゃうのかな…）

ミミは朦朧とする意識の中、そう思っていた、人面オオカミの牙には、なにか精神的な毒でも有るのだろうか、喋る事さえまならなかった。

ミミも今までに、モンスターに襲われ、無残な姿態となって発見された冒険者の遺体を沢山見たことが有る、中には下半身より上は、なかった遺体もあった。

（私も：あんな風に死んじゃうのかな：）

ミミはその、下半身より上はなかった死体の事を思い出し、恐怖を覚えていた。

「あうう：」

いつの間にかミミの眼元から、涙がこぼれ始めていた。

（嫌だよ：死にたくないよ：）

「ぐるるるる」

人面オオカミたちはもはや戦闘が不可能な所までミミが弱ったのを見切ったのか、徐々に包囲の輪を縮ませて行った。

（助けてよ：）

ミミは涙をたれ流しにしながら思った。

（助けてよ：勇者様：）

「ぐるるるる：がっ」

ついに、一匹の人面オオカミが、そのミミの命を奪うべく、人間の形をしているはずの口を、もはや原型をとどめないほどに大きく開きながら、襲いかかった瞬間！！！！！！

「ダン！」

と、突然、ダンジョン内に、そんな聞いたこともない、乾いた音が響いた。

「ぎゃいん!!」

「どさッ…ざざざざ」

そして、そのダンジョン内に響いた乾いた音とともに、突然頭を撃ち抜かれ、瞬時に絶命した人面オオカミは、襲いかかろうとした顔のまま、地面に転がり、そのまま、動かなくなった。

「え…え…」

(え…一体どうして…)

目の前でミミを襲うとした顔のまま、死んでいる人面オオカミを見ながら、ミミは虚ろ下に、一体何が起こったのか、理解できなかった。

(…なに…え?)

他の人面オオカミも突然の攻撃に、手間取った様子で、一体どこからの攻撃なのか、ミミを襲うことすら忘れ、混乱していた。

「ダン!」

「ギャイン!」

またもや乾いた音とともに、人面オオカミの頭に穴があき、一瞬で

絶命する

（もしかして…）

ミミは、何とか今でも残っている思考能力をなし崩し的に、全力で使って、今起こった現状と、そして、その現象は何なのかを理解した。

「だれかが…助けに来てくれた…」

ミミはそう言った。

そして、ミミは遠くに、眼から涙が流れているせいか、ぼけていて良く見えないが、誰かの姿を見つけて、こういった。

「勇者様が…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945x/>

現代的なもので、ファンタジーを旅する。

2012年1月4日14時53分発行